

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 101 号

史跡めぐり「かまくらみちを歩く」	西野 賢二 ...	1
エッセー「くげぬま断章」(Ⅲ)	山上 英男 ...	5
多摩と湘南 —私の二都物語— [1]	植松 民也 ...	11
「楷の木」その後	竹内 広弥 ...	20
鵠沼の生き物あれこれ		
—ゆかりの生物と外来生物—	渡部 瞭 ...	24
転載「林達夫のお住い拝見」		
雑誌『スタイル』昭和14年8月号	館 真 ...	41
今井達夫遺稿 ⑥「花卉の虚」	今井 達夫 ...	46
「鵠沼を語る会」活動の記録(平成22年4月~9月)	総務担当 ...	63
編集後記		66

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鵠沼村久久比奴末半良」

とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

史跡めぐり 6月15日（火）

「かまくらみちを歩く」 実施報告

西野 賢二（会員）

今回の史跡めぐりは本会会員である小林政夫氏を講師としてお願いし、遊行寺から若尾山まで歩いて学び、充実の一日を過ごすことができた。歩いた距離は約2キロメートル。それを2時間半かけて小林氏プラス渡部瞭氏、有田氏を始めとする博識の会員達よりの濃密な説明があり、ひとつひとつの史跡について今までの知識にたくさんの上積みをすることができた。

以下、巡った順番に従っての報告である。

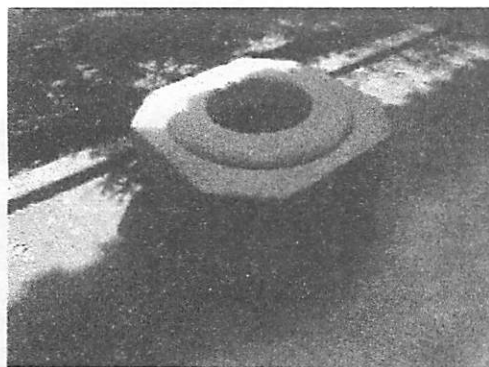
1. 遊行寺

- ・ 御膳水
- ・ 江の島弁財天遥拝の鳥居の袴石

今まで何十回も遊行寺を訪れているが、今回説明を受けて初めて知ることができた。やはりなんとなく見ているだけじゃダメなんですね。

- ・ 中雀門

久しぶりに見た。とてもきれいに改修されていた。正面に菊の紋、横に葵の紋。その訳は建立時に紀州家の力が・・・云々。勉強になりました。



江の島弁財天遥拝の鳥居の袴石



中雀門

・放生地

寺務所内にあがり展示物等を見、花しょうぶを鑑賞。そして放生池わきにあるメダカ池の説明。(渡部かほり会員の「藤沢メダカの会」事業の一環)

30年ほど前、子供たちと放生地でザリガニをとったことあり、反省。

・敵御方供養塔

国の史跡に指定されている由。説明書きを含めて、周囲がもう少し整備されていると良いなと感じた。ちょっと寂しい。

・長生院

解説を聞いていて、事前に「小栗判官・照手姫」の物語をしっかりと読んでおけばもっと良かったのにと反省。

長生院へ向かう道の左側の墓所のあたりが明るい。以前は大木が何本かあって暗い感じだったのだが。

・いろは坂

全部で四十八段。段を作るにもいろいろと考えられているのですね。

・赤門 真徳寺

若い頃駅前の寿司屋で飲んでいるとき、板前から「真徳寺の和尚がよく来ますよ」と言われたことを思い出す。前住職のことだ。説明をまじめに聞かず不埒なことを思い出していた。

・伝板割浅太郎の墓

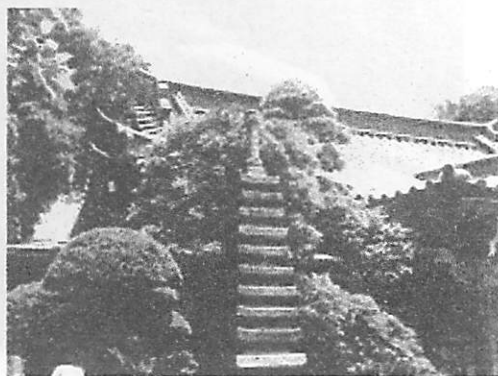
本当の墓だと信じたい。うまく話を作って宣伝すればけっこうな観光名所になるのでは、なんて余計なことを考える。

・黒門(惣門)と傍示石

よく見ると確かにりっぱな門。いつも何も考えずに素通りしていた。



いろは坂



赤門 真徳寺

2. 広小路

このあたりが日本三大広小路と言われているところだったとは。今の感覚ではちょっと考えにくい。江戸時代の地図を見直そう。

3. 遊行寺橋

「藤沢で抜き身の分は右へきれ」 私の持っている浅薄な知識と教養では江戸時代の川柳を簡単には理解できない。勉強せねばとまた反省。

4. 滝川と大鋸引森家

なぜ滝川なのかの説明はもちろん、よくあふれるので最近バイパス工事を完成させたとのこと。全く知らなかった。小林氏は御高齢（失礼）なのによくまあ世の中の出来事にアンテナを張り巡らせて知識を取り入れているもんだわいと感心。また感心。そしてまたまた反省。

おがくず意味を今頃知る。

5. 藤稻荷

山腹にあり、階段を昇らねばならず「あそこにあるよ」で誰も行かず。某会員が「後で見に行く」と言っていた。えらい。私もうなずいたのだが、未だ果たせず、情けなし。

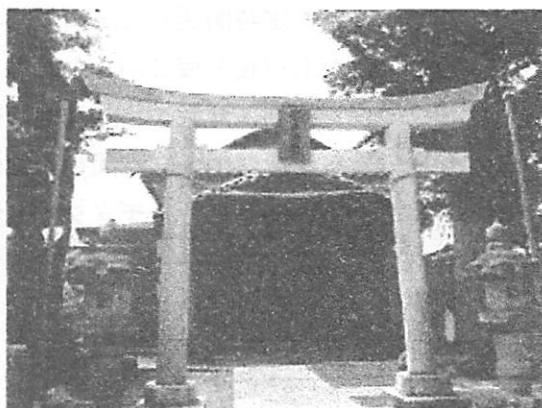
この辺りで知人に会う。「何してんの。ずいぶん疲れるひまつぶしだねえ。少しやせたね。酒は飲んでるかい。」短い時間にいろいろ言われる。

6. 船玉神社

以前訪れたときの記憶よりも狭く感じた。周辺地域の人たちの整備の手が入っていることがうかがわれた。



滝川



船玉神社

7. 船久保貝塚跡

遊行寺の裏山に西富貝塚もあり、この周辺は今と同じように温暖で住みやすい場所だったようだ。その時代に生まれていたらどんなひまつぶしをしていたんだろう。

8. 大正橋

大正十五年船久保と蔵前を結ぶ新橋として完成。船久保・蔵前という地名は残しておきたかった地名。

9. 御幣山

この台地上の大きな団地の下にたくさんの遺跡があり、地名の基となった言い伝えが残っているのか。そっと見上げる。

10. 奥田堰跡

かつてはここで取水し、広い田んぼに水を送っていたなんて今の景色（ビル群、商店、住宅、工場等々）からはとても想像がつかない。私は三十八年前に藤沢の住人になったが、田んぼの風景は見えていない。

11. 御幣山石仏・石碑群

よくこの道を通っていたが、いつも横目でちらっと。きちんとそばまで行って見たのは初めて。

12. 御所ヶ谷橋

御幣山城を御所に見立てての地名から来た橋の名前とは。本当によく調べるといろいろなことが分かってくるのですね。

13. 若尾山

ちょうど予定時間通り若尾山に到着。最後の説明を受けるが、私ばかりではなくみんなも空腹と疲労からか、あまり真剣には聞いていないようだ。記念の集合写真を撮り、解散。小林氏への御礼もそこそこに駅方面に急ぐ。近くの食堂に入り空腹を解消。二時間半の勉強で頭が一杯になり、そして腹も一杯で本当に心地よい満足感。メデタシ、メデタシ。

(にしの けんじ)

くげぬま断章（Ⅲ）

尼寺にて

山上 英男（会員）

涼しければ葬るに好しと尼寺を言ひてし人は風にねむれる

『挽歌 第二』（阿部 昭）

◆ 本真寺

挽歌と題して上記のように詠まれた阿部 昭の父も、また彼の不幸な兄も、この寺に葬られている。自身も1989年5月、55歳の若さで、ここに眠った。

寺は、鶴沼海岸の本真寺である。しかし土地の者はみな尼寺で通している。ここに祖父母や両親の墓を持つ私も、そう呼んできた。

立秋とは名ばかりで、まだ暑い。きょうは施餓鬼の供養で卒塔婆を新しくするので、花と線香を持って家内とふたり、寺の門をくぐった。

我が家の墓を清めたあと、私はいつも他に二つの墓に手を合わせる。

ひとつは子供のころ仲良しだったシゲちゃんの墓であり、いまひとつはこの阿部 昭の墓である。

シゲちゃんは昭和21年の夏、9歳のときに海で死んだ。一緒に溺れて私だけが助けられた。ずっと負い目がある。

この悲しい事件のことを、昭は『星』という短編小説の最後にふれている。深い縁を感じながら、また一読者として、昭の墓にも手をあわせる。

近頃は墓が増えて、そのぶん寺域の樹木が少なくなったようだ。

しかし桜の大樹が枝を張る藤棚下のベンチに腰をおろせば、相変わらず、ここは風が吹き抜ける。用意されている茶を飲んで、しばらく涼んだ。

◆ 父たちの戦後

読経が続く本堂を前にして風に吹かれていると、昭の文章が思い返された。

…その晩、おやじは、おふくろに笑い話めかしてこういったりした。

「おれの葬式は、尼寺でやってくれ。あそこは、木がたくさんあって、夏は涼しくていい。」

尼寺は、僕の家から歩いて五分のところにあった。木立にかこまれて、爽やかな海の風が吹きかよう本堂があった。

(中略) その夜の冗談通り、おやじは夏の最も暑い時分に死に、尼寺での葬式はかくべつの涼しさで老いた旧友たちを喜ばせた。

(『大いなる日』)

小説『大いなる日』は、語り手の〈僕〉が、敗残の恥辱に耐えて戦後を生きてきた「帝国海軍のはしくれだったおやじ」の最期を視つめた作品である。

この父と「友情を結ぼうとして」結べぬままに終わった〈僕〉は、しかしその死を契機に、書き残された遺品などから父親への理解を深める。

たとえば、〈おやじ〉の手帖やノートの余白に、 $117-20=97$ というような簡単な計算式を幾つもみつけ、〈僕〉は父の戦後がどういうものであったかに思い至りもする——「死の日までつづく長い休暇」を生きる「生き残った軍人の父」の、鬱屈とかアンニユイ(屈託)といったものに、である。

117から引き算された答えの数字は、父親が誰かの葬儀に出るたびに大きくなるのだった。実は、この117という数字は、50数年前に海軍兵学校を卒業した同期生の数だった。そこから生存者の数を引き、死者の数を確かめるという奇妙な引き算を〈おやじ〉はしていたのである。

普通なら総数－死者＝生存者とし、互いの生存を確認するはずのものだろう。ところが〈おやじ〉は、戦後ずっと死者を数え続けていたのだ。

寡黙な、その数字に〈僕〉は〈おやじ〉の戦後を見たのだった。

私の父は軍人ではなかったが、また中学時代から趣味でヴィオリンを弾いてきたような男だったから、軍隊になじめたとは思えなかったが、それでも戦後ずっ

と「〇〇戦友会」の名簿を管理していて、父の葬儀にはその戦友会の生花が届き、戦友会の者だという老人3人から、丁重な挨拶があった。

阿部 昭が描いた「父親」の戦後とは、ずいぶん違う現実を生きた私の父だったが、それでも、戦地から生還した者に見られる、ある寡黙さが、どこか似通っているように感じられた。

この世代の男たちは、戦友の葬儀に出るたびに、多くを語らず自分たちの「戦後処理」をしていったのかもしれない…そんなことを思った。

一息入れたので墓地へ出た。なんという偶然か、黒揚羽蝶が舞った。

「きょうここで、黒アゲハなんて、誰の魂かしら…」と妻が言った。

墓を清めてから、昭の墓石へそっと手を合わせた。

その墓地は土が白く乾いていた。



◆ 海の子供たち

続いて、シゲちゃんの墓の前に立つ。

昭の『子供の墓』という作品には、尼寺を遊び場にする彼の3歳の息子サブロウ

が「サブちゃんのお墓は、どれ？」などと訊ねながら「榎葉（はしば）家や浅場家や山口家に柄杓二、三杯ずつ」手桶の水をかけて歩く姿が、ユーモラスに描写されている。

その榎葉の墓のひとつに、シゲちゃんは葬られているのだ。

私も水をかけた。「きょうは暑いからね」という気持ちからだった。

戦争が終わった翌年の夏休みは、金色に輝いていた。

P51やグラマンの機銃掃射を心配しないで、存分に海で泳げたからだ。

おまけに、この夏休みを境に、私たち〈海岸の子〉は藤沢第3国民学校（現 鵜沼小学校）から分かれて、近くに新しくできる鵜沼国民学校へかわることになっていたのも宿題も出ていなかった。

この夏は、真っ黒になって遊べる日々が期待できたのだ。

食糧不足でまともな食事はできなかったが、胸はたのしく膨らんだ。

シゲちゃんは私たち学年のリーダー格だった。

登校する時は、上級生に率いられた分団で、隊列を組みながら行っただが、下校の時は、同学年のものが4、5人で群れて、道々いたずらなんかもして、遊び遊び帰ってきたものだった。

その遊びを、いつもシゲちゃんは思い付いたり、面白くしたりした。

7月10日、この日は、この海の「海水（浴）開き」の日だった。

昼飯を済ませてから、私たち仲良し4、5人は皆そろって浜へ出かけた。赤か白の6尺ふんどしを、それぞれ気合を入れて締めた。シゲちゃんは白、私は赤だったのを覚えている。

火傷しそうなほどに熱い砂浜をピョンピョン飛び跳ねながら、皆いつせいにワーンと海へ飛び込んでいった。むろん先頭はシゲちゃんだった。

そして、そのままシゲちゃんは、あの夏のキラキラかがやく海に抱きとられて逝ってしまったのだ。

「海は、海で遊ぶ子供たちが可愛くなって、ときどきこうやって連れて行ってしまうのよね」と言った人がいた。

◆ シゲちゃんの夏

シゲちゃんが難に遭っているその時、同じ潮の流れに私もおぼれ、もがいていたのだった。

遠浅のこの海には「ドンブカ」と呼ばれる、海底を帯状にえぐる潮の流れがあって、その危険は知っていたが、うっかりそれにはまったらしい。

幸い私は、湘南中学（現 湘南高校）の生徒だったMさんに助けられ、浜に寝かされた。モウロウとした意識の中で「もうひとり溺れた一つ！」という声々を、私は遠くに聞いた。

昭の短編『星』に、次のようなエピソードが記されている。

…深みの多いこの海では、毎年子供が命を落とさぬことはなく、私の知っている子も何人か死んだ。いっぷう変わっていたのは、私と同年で、小学三年生の八百屋の息子の場合だった。夏休みに毎日のように泳ぎに通っていたのが、ある日、その日にかぎって、母親に、「さよなら、さよなら、…」と、何べんもあいさつして出て行った。

ふだんから剽軽な子だったから、当人はお道化たつもりだったに違いなく、母親も苦笑しながら送り出したが、夕方、水死体になって帰ってきた。

その日、その子が死ぬことを知っているものは誰ひとりいなかった。この海だけがそれを知っていたのだ…。

ああ、シゲちゃんのことだ。

なんべんもさよならを言って泳ぎに出たというのは、その通りで「やだよう、この子は！」と母親が言った、そのことは繰り返し聞かされた。

阿部 昭は1934年の生まれだというから、実は4歳も年長で同年ではない。しかし肝心なところは正確に描いている。

シゲちゃんが海から帰ってきたのは、翌日の早朝だった。

その夜は、深夜まで家族や町内のものが捜しに出たが、無念の思いで家に戻っている。そして、その晩遅く店の戸がドーンと鳴ったそうだ。

「シゲオの魂があの時、帰ってきたんだねえ」と、後にシゲちゃんの母親がくりかえしだれかれとなく話した。

翌朝、警防団や漁師の人たちがコモをかぶせて戸板にのせたシゲちゃんを連れ帰ってくれた。引地川からまっすぐ商店街へ出る道（現公民館通り）を、みな無言で歩いてきた。町内のおとなも子供も合掌して、これを迎えた。

あのときに見た、コモの先から出ていたシゲちゃんの白い足の裏は、ずいぶん長い間、私の脳裏から離れなかった。

神経が昂ぶっていた時、私の祖母と母が話しの中で「父親が戦地にいる間に子供を死なせてしまったら大変だった」と、洩らしているのを聞いた。

それはいっそう私の胸をじくじくさせ、心を重くした。

あのつらい海水開きの日からちょうど一ヶ月後の8月10日、鶴洋国民学校の開校式があった。私はシゲちゃんと交換した長方形の小さなメンコを、ズボンのポケットに入れて出席した。

シゲちゃんの夏が終わった。

◆ 吹く風に聴く

本堂では読経がつづき、今は供養する家の名が読み上げられている。

この海辺の町のくげぬまの、この小さな寺に刻まれた、これは鎮魂の譜だ。

ここの風にねむる人たちの多くは、その人生の物語を雄弁に語りはしない。

しかし、それぞれの家族や親しい者たちに悼まれ、記憶され続けてゆく限り、その物語は色あせることはないだろう。

それでもやがて、その記憶を持つ人たちがこの世を去り、物語が風に託されてしまったら、耳を澄まして吹く風に鎮魂の声を聴こう。

そんなことを思いながら、新しい塔婆をたて、私たちは寺を出た。

(やまかみ ひでお)

多摩と湘南

—— 私の二都物語 ——

〔その1〕

会員 植松 民也

1. はじめに

鵠沼を語る会の機関誌『鵠沼』は、会員諸氏の献身的な努力によって100号に達し、敬服の至りである。

その一方で私は、地元の人たちが“語る”のを聞きたいと思って入会したということもあって、ほとんど手伝うこともせず、例会で時々遠慮がない発言をし、史跡巡りなどに参加した以外は、何度か展示会場の当番で座ったくらいなので、申し訳なく思っている。

たまに自宅の敷地でできた柿やスモモなどを例会の会場に持参したのは、その埋め合わせのつもりであって、決して自慢したつもりではない。

しかし、親から相続した土地持ちの資産家だなどと誤解されては心外なので、喜寿に達したこの辺で、今までの言い訳を兼ねて前後のいきさつや周辺の背景などを説明し、鵠沼海岸で感じていることなどを、一通り書いてみようかと思う。

実は私の自宅は、今でも多摩川中流の稲田堤にあり、私はまだ藤沢市民にはなっていない。いくつかの偶然が重なって、鵠沼海岸に老後のためのマンションを買ってしまったのだが、いろいろと面倒なことがあって、いまだに引っ越しが済んでいないからである。

そんなわけで、方々に寄り道をしながら、多摩川畔の自宅と鵠沼海岸の別宅の間を、行ったり来たりしているうちに、いつの間にか10年以上もたってしまった。

（なおこの期間に私は地球一周を3回もしてしまったのであるが、そのことについては後で述べることもある）

慣れてしまえばこれが結構快適で、私が生きている間はこの状態が続くことになりそうなのである。従って結果的に鵠沼のマンションは、セカンドハウスのようになっているのだが、決して別荘として買ったつもりはなく、そんな御身分でもない。

以下の雑文は、はなはだ個人的なものではあるが、外からも対比して見た半住民の湘南・鵠沼論のようなものとして、多少の御参考になればと思うのである。

なお、冒頭の副題に「二都物語」としたのは“住めば都”のつもりであり、物語といっても、フィクションや特別のロマンスがあるわけではないので、期待しないでいただきたい。

2. 老後の安住の地を求めて

私は本誌91号の特集「語り継ぐ戦中戦後の記憶」に書いた一文でも少し触れたように、北海道の山間都市で生まれ育ったので、老後は自宅から海を眺めてのんびり暮らしたいという漠然とした望みをもっていた。

その後は長らく神奈川県教育庁所属の公務員として勤めていたが、戦中戦後の無理が祟ってか身体不調が続き、定年前に希望退職した。多少上乘せされた退職金は、少ない共済年金を補うために民間団体の年金組織に一括して積んでおいたのだが、この組織は政府のゼロ金利政策のために立ちゆかなくなって廃止となり、一時金として返されてきた。

今更実質金利ゼロの預金にしても、物価の変動によっては減少しかねないので、思い切って念願だった“海が見える老後の家”を探すことにしたのである。

勤め先に近い桜木町の駅前ビルに持っていたワンルームは、本やビデオでいっぱいになっていたので、まず身近な横浜市内に、多少広めの海が見える家を探してみた。しかし、条件に合う手頃な家は見つからなかった。

そこで、当時工事中だったアクアラインの向こうの房総まで行ってみたが、東京湾内は林立する工場の煙突の煙でかすんでおり、その昔私の姉の家の別荘があった九十九里方面も検討してみたが、健康的で文化的で交通や生活にも便利という、老後のための条件を満たす所は見当たらなかった。伊豆方面なども一応は考えてみたが、今さら不案内な遠い所へ行く気にはなれなかった。

結局は横浜の業者に紹介されて、海の眺望で有名な片瀬海岸の湘南ホテルでの説明会に来てみた。

江ノ島の手前の海は、サーフィンの若者でいっぱい、いつも身体不調の私も、見ているだけで元気が出てきそうな感じがした。

紹介されたマンションは、まだ着工前だったので、海岸沿いに広がる湘南海岸公園を歩いてみたら、信号一つ西側の中部駐車場の角に完成間近のマンションが

あり、参考までにとまってモデルルームを覗いてみた。

私道1本隔てた西側には、レストラン・デニーズとゲームセンターがあり、国道の向こうの湘南海岸公園には、半地下式の広大な駐車場と円形の海風のテラスがある。またその手前の交差点の角には、木造平屋の小田急ショップと、同じ名前を表示したバス停もある。

この辺りは風致地区で、建物の高さに制限があり、5階屋上からの景観は最高で、すぐ前の国道の騒音は、防音サッシを使用しているので心配はない、と販売係の人は説明した。その人は、以前私の自宅の最寄り駅である中野島駅前の高層団地の販売を担当していたことがあるとかで、稲田堤辺りのこともよく知っており「ここは、あの辺と似た環境の所です」と言ったのには、ちょっと驚いた。

考えてみると、海と川の違いはあるが、片側が広々として、展望が開けた観光地でもあり、交通量の多い道路の外に自転車道路まであったりして、何かなじみの深いものを感じてきた。場所は小田急で2駅の間だが、湘南の海と富士・箱根・江ノ島が一望というのは捨て難い。

建物の分譲はほぼ終わっていたが、景色が良い4階の1戸分がキャンセルになって空いているのでどうかと勧められた。

価格は決して安くはなかったが、有り金を全部かき集めれば何とかなりそうなので、思い切って契約してしまった。

それが良かったのか悪かったのかは判らないが、今さら引き返すわけに行かなかった。

3. 鶴沼海岸の住みか

思えば50年ばかり昔、小田急の喜多見駅の近くにある電力技術研究所の資料整理をしていた時に、車内でビールが飲めるロマンスカーに乗って、所員皆で片瀬江ノ島に海水浴に来たことがあった。

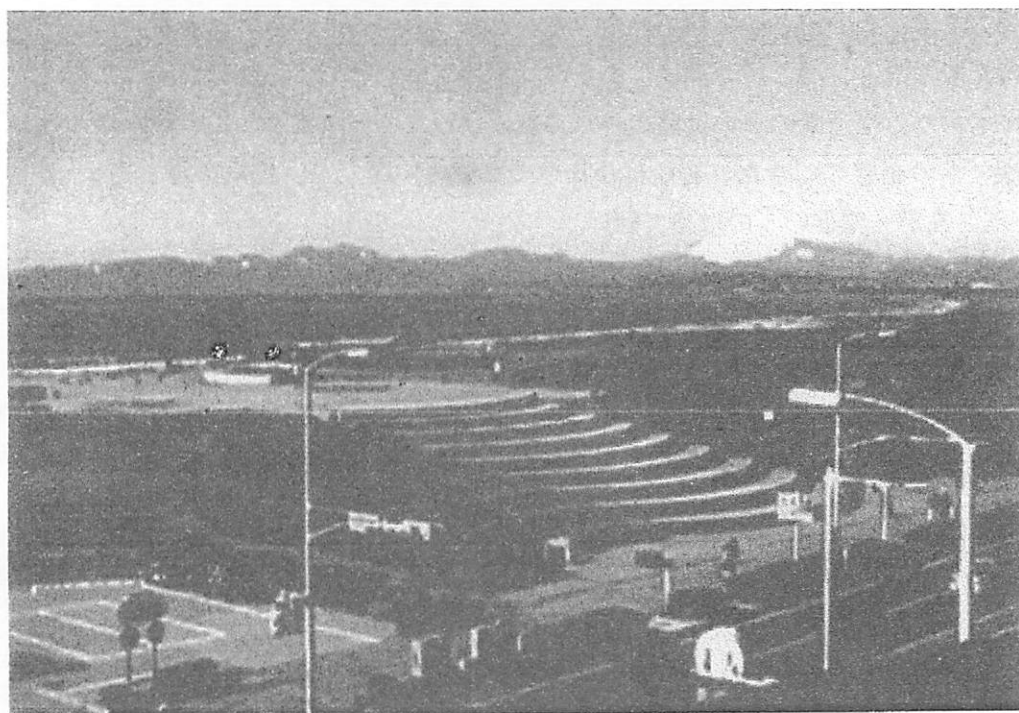
それからかなり後のことになるが、藤沢本町の隣の善行の丘の上にある県立教育センターに、稲田堤の自宅から通勤していたことがあり、江ノ島にも宴会などで何度行った。

近年までの江ノ島の灯台は、戦時中二子玉川で落下傘の訓練に使われていたものを、戦後改造して移設したものとのことで、なにか多摩川とのつながりを感じたものだった。

鵠沼海岸には、神奈川県職員のための保養所があり、教育庁所属の私にも、毎年夏には無料の利用券が配付されていたが、私は一度も利用したことがなかった。

藤沢市には県の車で来たこともあり、市民会館の隣の市立図書館（現在の南図書館）には県立図書館の配本車等で何回か来たが、夏休みの時期などは、道路の渋滞で出入りが困難なこともあった。市の中央図書館が湘南台に出来たのは、そんなことも理由の一つになっていたようだが、もちろん私の知るところではない。

特別のあてもなく、東京湾の向こう側まで老後の住みかを探したのだが、結局は昔なじみの所へ戻ってきたことになる。鵠沼海岸のマンションで何かなじみ深いものを感じたのは、当然のことだったのかもしれない。



鵠沼海岸のベランダから見た富士山と箱根の稜線。手前は海風のテラスと国道

私が入手したマンションは、国道に面した4階なので、眼下には相模湾と湘南海岸公園が広がり、左寄りに近く江ノ島と水族館が、そして江ノ島の右端の稚児ヶ淵の向こうに遠く伊豆大島も見える。正面の水平線から右寄りに伊豆半島と天城連山、それからゆるやかなスカイラインが雄大な箱根火山に連なり、さらに右寄りには霊峰富士の全容が望める。

もっと右手の前方には、神奈川県の屋根ともいわれる丹沢山塊と、ピラミッド

型の大山が聳え、手前に低く大磯の丘陵も見える。

湘南海岸公園の西側のサーフビレッジから先の海岸線は、相模川の河口付近で弓なりに向きを変え、富士・箱根・伊豆の手前の海を縁取って美しい曲線を描いている。また海風のテラスの向こうの海には、烏帽子岩が尖った頭を突き出して相模湾の点景になっている。

江ノ島から丹沢に至るこの180度のパノラマは、まさに日本を代表する景観と言っても過言ではない。しかし、強いて欠点をいえば、どんよりと霞んで遠くが見えないことが多く、海の色が澄んだ青色にならないのが残念である。

我がマンションの所番地は鵠沼海岸一丁目2番地で、すぐ東の片瀬海岸に接している。古い地図を見ると、境川の河口はこの辺にあり、引地川も東進してこの近くで海に入っていたようである。国道がこの付近から西に向かってかなり低くなっているのは、その名残らしい。この国道の車の騒音は予想以上のもので、防音サッシを追加して二重にしたが、普通の車には効果があっても、時々やってくる暴走族の爆音は、とても防ぎきれものではない。取り締まりはどうなっているのか。昼の渋滞を避けて夜間や早朝に走る大型車の騒音も相当なものである。

最初は便利だと思った電車やバスのダイヤも、私にとっては不便になってきている。新宿行の急行は鵠沼海岸に止まらなくなり、鎌倉行のバスも廃止に近い。

場所が小田急の2駅の間で、出掛けるにも買い物にも、やや不便ともいえるが、稲田堤の自宅も似たようなものであり、不満を言えばきりが無い。やはりすべての点で満足できる所など存在しないのかも知れない。

(ここでのその後の変化や体験と感想等については、次の号でもう少し具体的に書くつもりである。)

4. 多摩のふるさと

次に多摩と湘南を比較・対照する材料として、今も私の自宅がある多摩川中流の稲田堤の周辺等について、若干紹介しておこう。

鵠沼から行くとすれば、小田急江ノ島線の新宿行きに乗り、多摩川を渡る手前の登戸で、JR南武線の立川行きに乗り換えて、一つ目の中野島か次の稲田堤で下車する。また小田急のよみうりランド前駅からは、日本女子大の前を通過して稲田堤へ行くバスの便もある。

自宅がある場所は、うなぎの寝床とも形容されるほど多摩川に沿って細長い、

川崎市が形づくられる源になった「稲毛・川崎二ヶ領用水」の、上流側(上河原)取り入れ口のすぐ隣である。

現在の所番地は川崎市多摩区布田（フダと発音する）で、対岸を走る京王線に同じ名前の駅があるのは、多摩川の流れが変わって分断され、こちらが飛び地になったためである。

私がここに住むことになったのは、母の妹の嫁ぎ先に子どもができなかったので、次男坊だった私が養子に來たからである。

養父は多摩川本流の二ヶ領用水の堰堤を施工する会社の責任者だったが、工事が終わって引き渡しが進んだ後にも、何度もやってくる役人の接待で胃癌が再発し、私が高校を出た年に、苦しみながら死亡した。養父が遺したものは、工事用の借地と、仮設の建物に手を加えた自宅だけだったので、私を親の財産で楽をしている資産家などと誤解されるのは心外なのである。養父の葬式の時には、全盛だった稲田堤の桜の花吹雪が舞い、咲き始めた多摩川梨の白い花と黄色の菜の花畑が一面に広がって、夢のような美しさだった。今では想像もつかない。

ここ二ヶ領用水取り入れ口から上流側の多摩川の土手は、戦前は東京の北の飛鳥山と並ぶ桜の名所といわれていたが、戦後の産業優先の時代に、自動車用の多摩沿線道路が建設されて、稲田堤の桜はほぼ全滅した。

しかし私の自宅の周辺は、用水取り入れ口で土手が曲がって引っ込んでいる関係から、戦前からの桜の最後の1本と、戦後間もなく植えた桜が数本、大木になって残っている。

それは大変結構なことであるが、私以外には手入れをする人がいなかったために、枝がどんどん伸びて私の手に余ることになり、風が吹けば我が家の屋根をこすったり、私が植えた柿の木と枝を絡ませて困っているのである。この柿はとても甘くなるので、野鳥や近所の人に目をつけられ、鶺鴒を語る会の皆さんにも評判が良いらしい(もちろん無料なので)。しかし、相当の大木になっており、私も高齢になって、採るのも運ぶのもかなり辛いので、怪我をしないうちに根元から切り倒そうか、と考えているところである。

さて、自宅の北側へ少し行って、布田橋の信号の所へ出ると、正面に二ヶ領上河原堰堤があり、対岸の右手に日活調布撮影所（日本活動装置）、さらに右手に遠く東京タワーも見える。

左寄りの対岸には、甲州街道の布田五宿からなる調布市中心部のビル街が見え、さらに左手前には、昔の日活多摩川撮影所（大映東京撮影所を経て現在は角川大

映撮影所)、東京オーヴァル京王閣競輪場なども見えている。また多摩川の上流方向に遠く府中の東京競馬場の塔があるが、手前の京王相模原線の鉄橋などと重なって見えにくくなっている。よく晴れている日には、その上に奥多摩や秩父の山々が青く霞んで見えることが多い。

自宅の南側には、やや離れて多摩丘陵が連なり、右端から鎌倉時代の山城・小沢城址、よみうりランド、日本テレビスタジオ、日本女子大西生田キャンパス、奈良時代の八角堂があった寺尾台と並んでいる。そこからさらに左寄りに遠く、明治大、専修大と、相模川に架橋した稲毛三郎の居館があった枳形城址の展望台も見える。富士山はよみうりランドの上に、頭だけ出している。しかし近年はどの方向も手前に建物などが増え、かなり見えにくくなってきている。



稲田堤の自宅付近から見たよみうりランドと富士山

(少し横に移動すると富士山とジェットコースターは完全に重なるが、この写真ではそれを避けた)

昭和3年の春、明治大学の学生だった古賀政男は、マンドリンクラブの仲間と稲田堤に花見に来て、あの名曲「丘を超えて」が生まれた。最初はマンドリン曲で歌詞がなかったので、作詞を島田芳文に依頼したところ、彼は稲田堤と間違えて小田急の稲田登戸(現在の向ヶ丘遊園)に下車し、既製の詩に手を加えて間に

合わせたのだという。原曲の前奏や間奏が妙に長いのは、そのためだと思われる。島田自身はその歌詞を誇りにして、北軽井沢の山荘に歌碑を建てたというのが、肝心の名曲発祥の地元では、記念碑建立の話はあったが、建てる場所のことなどで意見が一致せず、立ち消えになってしまったのは残念である。

私個人の思い出としては、北海道の自宅で父が集めたレコードの中にこの曲があり、兄が使っていたマンドリンを借りて、手探りで弾いていたことがある。後に偶然のことながらこの曲が生まれた所に住むことになって、感慨深いものがある。なお、古賀政男が見た丘には、戦後よみうりランドなどが造られた。

5. 白い鳥・黒い鳥

鶴沼の鶴は、古くはクグイと発音し、白鳥のことだといわれている。しかし現在では、白鳥も見かけないし、それらしい沼もない。時代の変化だといえそれまでだが、近年になっても、相模川や鎌倉の鶴岡八幡宮の池に白鳥が飛来したという情報があるのに、肝心の鶴沼ではそんな話を聞かない。東の境川（片瀬川）は無理としても、西の引地川には生物の種類が多いらしいので、紛れていることはないのだろうか。地名のゆかりとして、せめて小さな池にでも、白鳥を飼うことはできないものだろうか。

さて、川崎市立多摩図書館に事務局を置く稲田郷土史会では「あゆたか」という誌名の機関誌を出している。これはカモメをスマートにしたような白い鳥・コアジサシの現地での呼び方を誌名にしたもので、白い鳥「鶴」と良い対照といえないこともない。この呼び方は、急降下してアユを捕る姿から名付けられたもので、笛の音を軋らせたような鳴き声を、北原白秋はチリヒョウと表現し、依頼されて作詞した「多摩川音頭」の囃子ことばに使用している。

歌詞には多摩川中流の名所を歌い込んだ31番から成り、新民謡としては快心の作だという作者の言葉が伝えられている。

曲は町田嘉章、振付は花柳徳次で、笠に白い鳥の飾りをつけて踊るので、白秋が「鮎鷹踊り」と名付けたという。しかし歌詞が平明なのに、曲と踊りが素人には馴染み難いようで、盆踊りにする試みも人気今一つの感がある。曲が作られた昭和の初期と、戦後の環境や気質の変化なども影響しているのだろうが、もっと知られてよい名作だと思う。

稲田堤の堰堤付近の多摩川は、シラサギやユリカモメなどの白い鳥以外にも、

オシドリやカモの類など、多彩な鳥が集まってくるので、双眼鏡などで見ていると心が洗われるような思いがする。私は視力が落ちてきたので残念だが。

ところで、堰堤から少し上流の多摩川の上を、6本の高圧送電線が横断しているが、その電線に首が長い黒い鳥が数十羽、丁度楽譜のように点々と止まっていることが多い。

——試みに私がアルトリコーダーで吹いてみたら、『鳥の曲』でも有名なメシアンも顔負けの現代音楽になった——というのは冗談であるが。

この黒い鳥はカワウで、豊富な多摩川の魚を求めて、目黒の自然教育園や、遠くは上野の不忍池から遠征してくるのだという。

ウの羽は油分が少ないために水を吸収するので、水中で餌を採った後は、水で重くなった羽を川風に当てて乾かさないと、遠くの我が家まで帰れないらしいのである。「ウの真似をするカラス」という言葉があるが、ウだって生きていくのは大変らしい。

カラスはどこでもゴミを散らかしたりして嫌われ者だが、ヒヨドリやハトの汚し方も決してバカにならない。ハトは平和のシンボルとされているが、鶴沼のマニションのベランダに何度も巣をつくり、汚れ落としに困っていた。そこで、六会の日大生物資源科学部の市民講座でその対策を質問したら、「捕まえて食べるのが一番です」と答えられたのには驚いた。確かに昔エジプトを旅行して、ハトの料理を食べたが、クセがなくて美味だった記憶がある。増えすぎて困っているヒヨドリやカラスなども、食料が何かにしてしまう方法がないものだろうか。

湘南海岸には、トンビが人間の手に持った食べ物を襲うので注意との看板があるが、漁船の網に群がるカモメも大変なもので、私は自室に据え付けた野鳥観察用のズーム望遠鏡を時々覗いて、呆れているのである。

終わりに参考までに、白鳥を扱った文学碑について書いておこう。

鶴沼海岸から国道134号を東に行くと、京急長沢駅の近くの海岸に、若山牧水の「しら鳥はかなしからずや…」の歌碑がある。

その前には「横須賀市・若山牧水資料館」（長岡半太郎記念館に同居）があり、館内には同じ歌の自筆の軸が掛かっている。ところが“海の青”と“そらのあお”の順序が石碑の文と逆になっているのが興味深い。（私は数年前行ったので、現状は不明であるが）

鶴沼にも小さくても良いから、通りがかりでも無料で入れるあんな資料館があっても良いのではなかろうか。

（うえまつ たみや）

「楷ノ木」その後

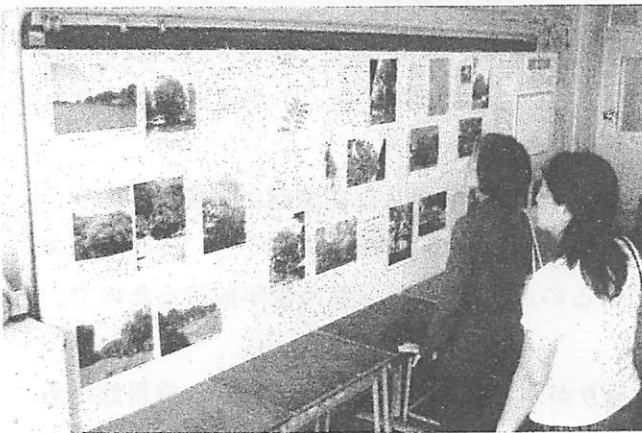
竹内 広弥（会員）

「学問の木」として知られる「楷ノ木」については、鈴木三男吉会員が会誌「鵠沼」第95号（2007年9月30日発行）に書かれている。「楷ノ木 — 鵠沼にも」がタイトルで、どのようにして楷ノ木を知り、魅了され、この楷ノ木を鵠沼にもという想いに至ったかが、その概要。

楷ノ木は日本古来の樹木ではなく大正初期に中国・曲阜にある孔子の墓所から種子のまま渡来したもので、孔子にちなんで「孔子木」とも、「学問の木」とも呼ばれている。鈴木会員は故東畑精一元東大教授らが書いた「楷樹（かいじゅ）物語」で楷ノ木のことを深く知り、興味をもたれた。珍中の珍木として裸一貫で渡来した楷ノ木に魅了され、楷ノ木の戦前における種子渡来と、それから育てられた木々の戸籍調べに一年の月日を費やし、その結果を「楷ノ木巡礼」（2002年3月初版 2004年4月改訂）と題した短編に纏められている。楷ノ木については多くの会員に語られ、鵠沼を語る会としても興味を持ち始めた。

学校の記念樹として

「学問の木」とも呼ばれる「楷ノ木」が鵠沼の地に大きく育ってほしい、という願いで、まず鵠沼中学校に話を持ち掛けた。2007年5月2日、創立60周年記



鵠祭で「楷ノ木」についてパネル展示

念式典で楷ノ木が記念樹として披露され、苗木2本が校舎中庭と正門右奥に、それぞれ植樹された。

同年9月22日に開催された同校の鵠祭で楷ノ木に関するパネル展示の依頼を受け、楷ノ木渡来の経緯、全国の楷ノ木の様子などを紹介した。

生徒・父兄たちに記念植樹された楷ノ木について、もっと知っていただくというのが展示趣旨でコーナーには、『楷の木』をいただいて、と題した丸山紳一校長（当時）のことがあり、“・・・「楷の木」は「学問の木」といわれていますので、鵜沼中学を象徴する記念樹となるよう、祈念しております。”と結ばれていた。

さらに片瀬中学校でも創立 60 周年記念として楷ノ木を植樹したいとのことで、苗木 1 本を寄贈した。2007 年 10 月 17 日、正門を入ってすぐ左の日当たりのいい場所に記念植樹され、立派な囲いと「創立 60 周年記念 かいのき（楷樹）」の説明板も設置され、いまでは 3 メートル近くの大きさに育っている。

同年 10 月 27—28 日開催の鵜沼地区公民館まつりで当会は“鵜沼に楷の木を”のテーマでパネル展示を行い、楷ノ木をアピールした。来場された多くの方は楷の木について知るのは初めてで、熱心にみておられた。

当時の鵜沼公民館長も、学問の木といわれている楷ノ木に興味をもたれたようだが、すぐには同館の敷地内に楷ノ木が植樹されることはなかった。

念願の鵜沼公民館にも植樹

それから 2 年ほどして、鵜沼公民館開設 50 周年記念の行事が企画され、そのひとつに記念植樹があり、幸いなことに当会が推薦した「楷ノ木」が記念樹として選ばれた。

2009 年 10 月 31 日、公民館開設 50 周年記念の行事が開催され、式典に先立ち新館西側の芝生で記念植樹が行われた。市長をはじめ教育長、館長、関係諸団体代表、ガールスカウトの子どもたち、関係者ら 50 名ほどが集まり、当会を代表して鈴木会員が鋤入れに参加した。



海老根市長による鋤入れ

楷ノ木について纏めた『鵜沼に「楷の木」を』と題した手作りのミニ・パンフレットを用意し、参加者によろこばれた。

植樹された「楷ノ木」

(2010 年撮影)



鵠沼中学校



片瀬中学校



六会中学校



第一中学校



松が岡公園



2009 年 10 月 31 日撮影

鵠沼公民館

教育委員会も楷ノ木に注目

これを機に教育委員会が「学問の木」といわれる「楷ノ木」に関心を持たれ、本年（2010年）、新校舎が完成した六会中学校に記念植樹したいので苗木を提供



六会中学生徒会メンバーによる記念植樹

して欲しい旨の依頼を受けた。

2010年6月4日の同校新校舎落成式の際、校庭に父兄、教育委員会スタッフらも集まり、生徒会メンバーの手で楷ノ木が植樹された。慣れない手つきでスコップを持ち、嬉々として植樹を終えた。

苗木入手が難しい楷ノ木

鵠沼ではこのほか、2007年に第一中学校に楷ノ木2本を寄贈している。この年の初夏には、むかしの松林の面影を残す松が岡公園に1本植樹、広々とした環境の中で育っている。

現在、ほかの中学校からも楷ノ木植樹の問い合わせを受けているが、育苗の状況が変わり、苗木の入手が難しくなっている。藤沢市善行にある県立総合教育センターには立派な雌雄株の楷ノ木が合わせて8本あり、秋には赤い実をつける。

昨年（2009年）12月、教育センターの協力を得て楷ノ木の種子を集め、長久保公園のスタッフに育苗をお願いしているが、その成果のほどは分からない。

苗木入手の問題は残るものの、これからも鵠沼を中心に楷ノ木の植樹に力を入れていきたいと思う。
(たけうち ひろや)

楷ノ木 (*Pistacia chinensis* Bunge) トネリハ・いぜノキ ウルシ科の落葉喬木

孔子の墓所には多くの木が植えられたが、弟子の中で最も師を尊敬してやまなかった子貢は、「楷ノ木」を植えた。「楷ノ木」は「孔子木」（牧野富太郎博士命名）とも呼ばれ、また科挙（中国の隋から清の時代までの官吏登用試験）の合格祈願木となり、歴代の文人が自宅に植えたことから「学問の木」ともいわれるようになった。合格祈願木とされたのは、科挙の合格者に楷で作った笏（しゃく）を与えて名誉を称えたからだと考えられている。また、その杖は「楷杖」として、暴を戒めるために用いたとされている。

鵠沼の生き物あれこれ

—ゆかりの生物と外来生物—

会員 渡部 瞭

はじめに

会誌『鵠沼』のバックナンバーを見ると、郷土史を中心テーマに掲げるサークルの会誌でありながら、生物に関する記事がかなり含まれるのに気づく。

主立ったものを列挙してみると、

001b 松露と防風/昭和18～20年頃の鵠沼の花々	伊藤 昌
002d 鴨のくる池	伊藤 昌
008b 鵠沼の野草(その1) 堀川デルタ地帯	伊藤節堂
008c 鵠沼の野草(その2) 海岸砂丘(引地川一辻堂境)	伊藤節堂
009b 鵠沼の野草(その3) 引地川左岸(国鉄鉄橋から鵠沼橋まで)	伊藤節堂
012d 鵠沼の「クグヒ」	伊藤節堂
013a 「鵠」について	富士 山
016b 夜明けのカナカナ	伊藤節堂
016c 幻の「くげぬまらん」を探して	塩沢 務
020b 桜貝と浜木綿について 防風、初茸、松露、しばたけ	富士 山
021b 幻のツキミソウ	伊藤節堂
024a 鶴について	富士 山
027b 幻のハマボウフウを育てる	伊藤節堂
057a 古老に聴く鵠沼の昔日 “松露”と“はつ竹”そして“ぼうふ”	
077j 「クゲヌマエンシス」と呼ばれる小さなエビの話	伊藤 聖
078e 「クゲヌマエンシス」補遺	伊藤 聖
084j 大きく広がったメダカの輪	渡部 瞭
085a 川袋低湿地形成と蓮池の変遷(序説)	渡部 瞭
088a クゲヌマランの初出について	伊藤 聖
088b 鵠沼海岸の桜貝	松岡 喬
093b01 幻の鵠沼蘭は生きていた	番場定孝
093b02 近年、鵠沼に住みついた蝶	竹内広弥
098b はす池 断想	吉田敏平
098c 「湘南アカウミガメ物語」	宮戸 光

行頭のコードのうち、はじめの3桁の数字は号数を表す。これで見ると、初期の30号までの間、健筆をふるった伊藤 昌、伊藤節堂、富士^{たかし}山の3氏は生物にも大いに興味・関心を示していたことがわかる。さらに塩沢 務氏が加わり、幻のクゲヌマラン再発見に力を尽くした。

30号以降しばらくの間、なぜか生物を題材にした記事が見られなくなる。

会誌『鵠沼』が現在のスタイル、すなわちワープロ原版の数十ページのものを年2回発行という形に定着するのは、日本を代表する名エディター、鈴木三男吉氏が編集長に着任した75号以来のことだが、そこに元朝日新聞科学部記者、伊藤聖氏が加わり、一段と格調高く変化に富んだ記事が掲載されるようになった。

まだまだ、鵠沼の生物に関する話題は尽きない。今回筆者は、これまでの先輩諸氏の記事となるべく重複しないように気をつけながら、いくつかの短文に分けて鵠沼の生物相の特色を採り上げてみようと思う。

更級日記と倭^{やまと}羅^{なでしこ}麥 ナデシコ

鵠沼を含む湘南砂丘地帯が文学作品に登場するのは、菅原孝標^{たかすえのむすめ}女によって平安時代中ごろに書かれた『更級日記』が嚆矢だといわれている。そこには、「にしとみといふ所の山、繪よく書きたらむ屏風を立て並べたらむやうなり。片つ方は海、濱の様も寄返る浪の景色も、いみじくおもしろし。もろこしが原といふ所も、砂子のいみじう白きを二三日行く。夏は倭^{やまと}羅^{なでしこ}麥の濃く薄く、錦をひけるやうになむ咲きたる。これは秋の末なれば見えぬといふに、なほ所々はうちこぼれつゝ、あはれげに咲きわたれり。もろこしが原に倭羅麥の咲きけむこそなど、人々をかしがる。」と出てくる。

「にしとみといふ所」が現在の藤沢市西富(遊行寺周辺)を指すのかは異論もあるようだが、いずれにせよここから山と離れて浜辺の砂道を進むこととなる。いくら少女の足でも「二三日行く」はちとかかりすぎと思うが、この日記は中年に達してから思い出を綴ったものだから、正確さは期待できない。

「もろこしが原といふ所」とは平塚のことだと平塚の方々は信じておられる。大磯には高麗山がそびえ、その麓には高麗神社が祀られていて、渡来人が多く住んだと伝えられているから、もろこしが原と呼ばれても不思議はない。

「倭羅麥」とは現在の標準和名ナデシコ(学名: *Dianthus superbus* L. var. *longicalycinus*) のことで、漢字では撫子と書き、カワラナデシコの別名もある。

ちなみに平塚市の市の花は、このナデシコである。

しかし、「もろこしが原といふ所も、砂子のいみじう白きを二三日行く」ということは、湘南砂丘地帯全体をもろこしが原といったとも読み取れる。平安時代の海岸線は、現在よりも3km程度内陸、すなわち東海道本線のあたりにあったと考えられている。国道1号に沿う茅ヶ崎市本村4丁目には1591(天正19)年の創建といわれる「海前寺」という寺号を持つ曹洞宗寺院があり、16世紀頃までは間近に海を望む位置であったことが想像される。

ナデシコは比較的乾燥を好む植物で、砂丘地帯でもよく自生する。都市化が進む1960年代までは鶴沼でも随所に自生が見られたが、現在はめっきり減少した。

会誌『鶴沼』第3号に川上清康氏が寄せた「私と鶴沼」の中に次の一節がある。

「その頃(※震災前)の海は、真に綺麗で片瀬迄は砂丘と松林が続き、辻堂に近い方では防風が一ぱい探れたものである。又松林には松露を採りに行き、到る処撫子や月見草が咲き、赤い蟹が庭先や台所口をはい廻っていた。」

今日、「やまとなでしこ」というと日本人女性への賛辞を意味し、特に古来美德とされた、清楚で凛とし、慎ましやかで男性に尽くす甲斐甲斐しい女性像を指す。これは植物としてのナデシコの可憐なピンク色の花の美しさと、ひ弱に見えながら荒れ地でも育つ逞しさからきているのだろう。

歌に詠まれた砥上^{かみがた}が原の生物相 クズ、シカ、シギ、フジバカマ

鎌倉時代になると、幕府のある鎌倉^{かみがた}の上方側にある鶴沼を通過する旅人や、鎌倉から遊山にくる武将なども増えた。当時の湘南砂丘地帯は砥上ヶ原と呼ばれる寂しい砂地の荒野だった。この寂しさが歌人の心をとらえ、歌枕となった。

最もよく知られているのは西行が『山家集』に載せている

「芝まとふ 葛のしげみに 妻こめて 砥上ヶ原に 牡鹿鳴くな里」

であろう。ここにはシバ、クズ、シカの3種の生物が読み込まれている。もっとも最初のシバは芝と書かれているが芝生のシバではなく、柴、すなわち藪をなす小さな木を指すと思われる。「お爺さんは山へ柴刈りに」のシバである。従って「藪を覆うクズの陰に牡鹿を隠し、寂しい砥上ヶ原に牡鹿の求愛の鳴き声が響いているよ」ほどの意味になろうか。今でも丹沢の山々が紅葉で彩られる頃、この声を聞くとができる。百人一首にも選ばれた猿丸太夫の「奥山に 紅葉ふみわけ 鳴く鹿の 声きく時ぞ 秋はかなしき」さながらの風情である。砥上ヶ原のニホンジカ(学名: *Cervus nippon*) はとうの昔に絶滅したと思われるが、近年、丹沢のニホンジカは増えすぎて問題化している。一昨年、そのうちの1頭が藤沢市域に

現れて「殺処分」された。

この西行の歌の碑は茅ヶ崎市文化資料館前と辻堂の熊の森神社にあるが、鶴沼にはない。文学マニアの間では茅ヶ崎や辻堂が砥上ヶ原であるとの認識がこれらの碑の存在のために広まりつつあることが、いくつかのブログなどで読み取れる。

熊の森神社の碑文は「柴松のくずのしげみに妻こめて となみが原に小鹿鳴くなり」となっているが、何を原典にしたかは不明である。

クズといえば、鎌倉に住んでいた冷泉為相が砥上ヶ原に遊び、次の歌を詠んで、『為相百首』に載せている。

「立帰る名残八春に結びけん 砥上が原の葛の冬枯」

こうしてみると、鎌倉時代の歌人の目に映った砥上ヶ原の植生は、クズが代表的だったと思われる。クズは現在でも鶴沼でわずかに自生が見られる。

クズ(学名: *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi)は秋の七草に数えられるほどよく知られたマメ科のつる性の多年草。根からは良質の澱粉、葛粉が生産され、漢方の風邪薬として有名な葛根湯かつこんとうが作られる(原料の一部に過ぎないが)他、蔓を細工物に用いて簞などが編まれたり葛布くずふが織られたりした。しかし、荒地にもよく繁茂し、他の植物を覆い被すマントル植物なので、きわめてやっかいな雑草として認識されている。元来東アジアから東南アジアが原産だが、欧米に持ち込まれて猛烈にはびこり、世界の侵略的外来種ワースト100 (IUCN, 2000) 選定種の一つとなっているほどだ。

従って、クズの生い茂った土地というのは荒地であって、決して豊かな土地とはいえない。少なくとも鎌倉時代の鶴沼は貧しい荒地だったといえよう。

西行没後の1186(文治2)年に編まれた『西行物語』には、西行が鎌倉に旅する途中砥上が原を通過、「芝まとふ…」の歌を詠んだその夕刻に次の歌を詠んだことになっている。但し、初出の「山家集」からは何処で詠んだ歌か推測できない。

「ころなき身にもあはれは知られけり 鶴立沢の秋の夕暮」

寂蓮法師の「さびしさは…」、藤原定家の「見わたせば…」と共に『新古今和歌集』の「三夕さんせき」に選ばれる西行の代表作として知られる。

この歌は大磯で詠まれたと信じて疑わない向きが案外多い。その根拠とされるのが17世紀の中頃に小田原の俳人崇雪とおちんこう(透頂香で知られる薬商外郎家主人)が五智如来の石仏を運んで草庵を結び「鶴立沢」の碑を立てたことによる。この「鶴立庵でんりゅうあん」には1765年に芭蕉の友人、大淀三千風みちかぜが入庵して俳諧道場となった。

しかし、この庵は西行没後500年を経て建てられたものだし、西行自身はどこ

で詠んだかを書き残していないので、明治時代、近代国文学が体系化されると、多くの国文学者の関心を引き、巷間でも様々な噂が飛び交った。

明治大正期、鶴沼で活躍した小説家内藤千代子は、友人に「あ、西行てばねエ兄様、大磯に鴨立つ庵と云ふのが御座いますわねけれどほんとの鴨立つ澤は、この鶴沼のあたりだつたんですつて、屹度あの片瀬川の辺でべもあつたのよ。昔はこゝらは大きな沼でね、その時分鶴の鳥つて鶴に似た大きな鳥が澤山おりてね、それで鶴沼といふんですとさ、現に池袋[※]なんてとこがありますと。あら、松岡さんに聞いたのよ、事實さう言はれると大磯よりか此方の方が本場らしいわ。こんなに茫々した一ねエ何百年か以前はきつとそんな沼だつたんでせうね。」と語っている。 ※池袋は川袋の勘違いだろう。

また、大正末から昭和初期、鶴沼に住んだ一高校長で歌人・国文学者の杉 敏介は、筋向かいに住む教え子の高瀬彌一と交流し、高瀬家の下の沼沢地にシギが降り立つことを聞いて次の歌を詠んだ。

高瀬彌一君より今も砥上の川袋に鴨あまた降り立つ由を聞きて、西行の跡なめりと思ひて
「砥上原いまも鴨立つ澤をおきて いづくに古き跡をたづねむ」

この歌を紹介した高瀬彌一の長女笑子氏は、「父はこの歌の碑を建てたかったのだろう」と述べておられる。

内藤千代子も杉 敏介も、よりどころは『西行物語』と思われる。先述のように、これは西行没後に編まれたものだから、確証とする根拠には乏しい。

「芝まとふ…」は砥上ヶ原といふ具体的な地名が詠み込まれている。砥上ヶ原とはどの範囲かには諸説があるが、辻堂^{やつまつ}は八松ヶ原(八的ヶ原とも)という呼び名があり、『源平盛衰記』や『平家物語』には砥上ヶ原と並記されているので、砥上ヶ原とは鶴沼、すなわち境川と引地川に挟まれた原野と考えたい。

鎌倉時代の砥上ヶ原は、単なる砂原だけでなく、両側の河川の自由蛇行による湿原や三日月湖(河跡湖)が点在していたと思われる。万福寺の寺伝では、開基荒木源海上人は、鶴^{くひ}の棲む池の一角を埋めて一字を建てたとされるから、万福寺のあたりにも引地川の河跡湖があったことが想像できる。

『鶴沼』85号の拙稿「川袋低湿地形成と蓮池の変遷(序説)」で考察しておいたように、湘南砂丘地帯形成史の上で最も陸化が遅れたのは、川袋低湿地と名付けておいた鶴沼藤が谷4丁目一帯である。『西行物語』の記述を信じるならば、このときの西行は鎌倉に向かっているわけだから、砥上ヶ原の歌を詠んだその夕刻に次の歌を詠んだということは、砥上ヶ原の鎌倉方向に半日行程のあたり、すな

わち川袋低湿地で鳴立沢の歌を詠んだと筆者は睨んでいる。

鳴というのは一種の生物ではなく、チドリ目シギ科の鳥の総称である。タシギ・イソシギ・ヤマシギ・アオシギなど種類が多いが、いずれも嘴・脚・趾などが長く、水辺に棲み、水棲の小動物を餌としている。西行が出会ったのは何という種の鳴かは特定できないが、出会った場所は沼沢地と考えるのが自然である。

「沢」という漢字には丹沢の沢登りなどに使われるように山地の小流を指す用例と、沼沢地のように低湿地を指す用例とがある。鳴が群れたつのは無論後者である。大磯の鳴立庵付近には前者はあるが後者はない。

鳴立庵に住んだ大淀三千風には次の歌がある。

「鳴立ちし沢辺の庵をふきかへて、ころなき身の思ひ出にせん」

この歌に詠み込まれた「沢」は、明らかに前者の用例である。鳴立庵は沢辺にあるが、海岸にもほど近く、浜辺に群れたつシギ科の鳥もあるから、大磯で詠まれたことは絶対にあり得ないとはいいきれないが、かなり不自然である。

さて、これまで紹介した鎌倉時代の歌人が砥上ヶ原を詠んだ歌では無人の荒野しか連想できないが、多少なりとも人の姿が想像される歌が一首ある。

鎌倉三代將軍源 實朝が1213（建保元）年編んだ『金槐和歌集』に

鳥狩しに、砥上が原といふ所に出で侍りし時、荒れたる庵の前に蘭咲けるを見てよめる

「秋風になに匂ふらむ藤袴 主はふりにし宿と知らずや」

とあるのがそれだ。「蘭」というとカトレアやクゲヌマランを連想するが、鎌倉時代の蘭はフジバカマ(学名：*Eupatorium fortunei*)を指したらしい。庵の前に咲いているのだから、野生ではなく人為的に植栽されたものかもしれないが、いずれにせよ余り派手な花ではない。かつては鶴沼にも自生が見られたのだろうが、『鶴沼』1号の伊藤 昌氏の「昭和18～20年頃の鶴沼の花々」にも、8～9号の伊藤節堂氏の「鶴沼の野草（その1～3）」にもフジバカマの記録はない。筆者の記憶も不明確である(拙宅にはプランターに植栽してあるが)。少なくとも現在の鶴沼では顕著な分布は認められない。

これまで見てきたように、鎌倉時代の歌人に詠まれた砥上ヶ原の歌は、残念ながらここ鶴沼に歌碑などが建てられた形跡がない。先述のように鶴沼以外の場所には歌碑が建てられている。そのため、歌碑のある場所でその歌が詠まれという誤った認識が広まっていることは、問題といわざるを得ない。

筆者の夢は、砥上ヶ原の名残が忍ばれる一角にクズとフジバカマを植えた小公園を造り、そこにこれらの歌(杉 敏介の歌を含んで)を刻んだ歌碑と解説板を建

てることである。それにふさわしい場所としては、「第一蓮池」の西に隣接する一角を推薦したい。もっとも、クズが外にはびこらない工夫が必要だが。

鶴沼の風物詩となった外来種 オオマツヨイグサ オオキンケイギク

先に紹介した会誌『鶴沼』第3号に川上清康氏が寄せた「私と鶴沼」の中にもすでに月見草が紹介されている。

鶴沼は開港地ヨコハマから近いために、外来種がはびこるスピードが速い場所だが、砂地という養分が少なく保水力のない場所で、塩害を受けやすいこともあり、そこで繁殖できる生物の種には制限がある。そういった悪条件に打ち勝って繁殖する種は、ある意味でやっかいな種でもある。

月見草というのは、ツキミソウ(学名：*Oenothera tetraptera*)という標準和名の種(滅多に見られない)ではなく、オオマツヨイグサ(学名：*Oenothera erythrosepala*)を指す場合が多い。大正時代、竹久夢二が作詞した『宵待草』(作曲：多 忠亮)が流行し、ヨイマチグサの別名も生まれた。昭和に入ると『月見草の花』という童謡(作詞：山川 清、作曲：山本雅之)が作られ、鶴沼在住の井口小夜子によりレコード化された。

マツヨイグサとはアカバナ科マツヨイグサ属(学名：*Oenothera*)全体を指す場合と同属に含まれるマツヨイグサ(学名：*Oenothera stricta*)という種を指す場合とがある。いずれもアメリカ大陸原産の外来種である。種としてのマツヨイグサも月見草と呼ばれることがあるが、やはりオオマツヨイグサを指すと考えたい。

オオマツヨイグサは人の背丈ほどにもなる大型の草で、レモンイエローの径約7cmの大きな花を日が落ちてから咲かせる。花は一晚でしおれるが、次々に咲くので長期間楽しめる。独特の芳香があり、開花の時にかすかな音を立てる。

砂丘や河原のような乾燥の激しい場所でも良く生育し、目立つので、鶴沼の風物詩として文学作品にも登場した。

ところが、このオオマツヨイグサの姿を近頃鶴沼ではとんと見かけない。種としてのマツヨイグサも同様である。これは全国的な傾向のようで、インターネットで検索すると、理学部や農学部の学生が卒業論文のテーマに採り上げている例が複数見つかった。拙宅の庭でもいつの間にか絶滅し、これに代わってメマツヨイグサ(別名：アレチマツヨイグサ、学名：*Oenothera biennis*)が出現した。

マツヨイグサ属で健在なのがコマツヨイグサ(学名：*Oenothera laciniata*)である。名のように小さいだけでなく茎は地上を匍匐する。潮風にも強いらしく、浜

辺近くの砂防林の外側でも、ハマヒルガオ(学名：*Calystegia soldanella* (L.) Roem. et Schult.) やコウボウムギ(学名：*Carex kobomugi*)と肩を並べて繁茂している。

近年鵺沼でも園芸種として一般化し、逸出して野生化しているのが白花で縁が赤っぽくなるヒルザキツキミソウ(学名：*Oenothera speciosa*)だ。名のごとく夜咲くのではなく、昼間でも開花している。

健在の外来種で鵺沼の風物詩といえそうなのがキク科のオオキンケイギク(学名：*Coreopsis lanceolata*)である。明治時代に鑑賞目的で北米から導入されたが、繁殖力が強く、たちまち野生化した。

鵺沼でも至る所で見かけるが、最も分布が顕著なのが小田急線沿い、ことに鵺沼海岸1丁目付近である。

このオオキンケイギクは、強い繁殖力で在来植物を駆逐してしまうため、日本の生態系に重大な影響を及ぼすおそれがあるとして、2006年2月1日より特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(外来生物法)の指定第二次指定種に指定され、栽培や運搬、販売などが禁止されるようになった。違反すると処罰されるので要注意。

1978(昭和53)年夏、鵺沼海岸4丁目から辻堂東海岸にかけての自転車道路沿いで外来寄生植物のアメリカネナシカズラ(学名：*Cuscuta campestris* Yuncker)が繁殖。9月22日の神奈川新聞「私の意見」欄に鵺沼を語る会の伊藤節堂会員が投稿して話題になった。鮮やかな黄色の蔓だけで葉はなく、海岸に生えたハマヒルガオやハマエンドウ(学名：*Lathyrus japonicus*)に絡みついて寄生する黄色い蔓で、ヒルガオ科だが、とてもヒルガオとは思えない小さな花をつける。海岸の乏しい生態系にダメージを与えるため、早速処分されて、現在はほとんど見かけない。

鵺沼といえば松 クロマツ ショウロ クゲヌマラン ハマボウフウ

郷土資料展示室の仕事をしていると、小学校から老人会まで様々な団体に鵺沼について解説する機会がある。ある時「太陽の家」の目の不自由な方々にお話をする機会があった。目の不自由な方は鵺沼をどのように感じるのだろうか。解説の準備のためいろいろ思い巡らしているとき、ふとあることに気づいた。いわゆる「五感」のうち視覚に障害がある場合、他の「四感」をフル稼働して障害を補うことだろう。中でも聴覚は最も重要ではなかろうか。鵺沼の特色を聴覚で知る場合、何が最も適切か。鵺沼らしい音、それは何だろう。

大正時代、鵺沼に住んだ小説家島田清次郎が詠んだ次の歌がある。

「鶴沼は淋しい海辺 松風と 波の音ばかり 訪ふ人もなし」

この歌を紹介しようと思って、「松風」という言葉はあるが、他の植物の名に風の字を加えた二字熟語はなかなか見当たらないと気づいたのである。「松風」の語はすでに『万葉集』にも詠まれ、『源氏物語』の段にも用いられているし、能にも『松風』がある。もっともこれは女性の名だが。

大正初期に鶴沼に住んだ哲学者、和辻哲郎の随筆集に『松風の音』がある。

また、芥川龍之介が鶴沼に幽棲する谷崎潤一郎を訪ねたときの句に

「松風や 紅提燈も 秋隣」

というのがある。しかし、鶴沼に住むようになると龍之介にとって松風が恐ろしい存在になった。『鶴沼雑記』に次の件がある。

「僕はこの頃空の曇つた、風の強い日ほど恐しいものはない。あたりの風景は敵意を持つてぢりぢり僕に迫るやうな気がする。その廊前に恐しかつた犬や神鳴は何ともない。僕はをととひも二三匹の犬が吠え立てる中を歩いて行つた。しかし松風が高まり出すと、昼でも頭から蒲団をかぶるか、妻のある次の間へ避難してしまふ。」

一方、鶴沼の松をこよなく愛した人物に歌人與謝野晶子がいる。

「鶴沼の松の間に来てあそぶ 波かと思ゆる春の雪かな」1920.3 東家にて

「鶴沼の碧瀾荘をおとずれて 松とある日の春の夕かぜ」1930.4 碧瀾荘にて

「たそがれの露台に立てば悲しくも 海より深き松原の見ゆ」同上

「三月や墨紫の松原の 十四五町のよひやみのいろ」1939.3 鶴沼ホテルにて

「鶴沼はひろく豊かに松林 伏し春の海下にとどろく」1939.3 鶴沼海岸にて

「春の夜の星より高くさしかはす 松の枝がちの浜の宿かな」同上

「鶴沼の花もあらざる満目の 松の間にうぐいすの啼く」同上

このときのウグイスの声は、死の半年前、晶子の病床に届くのである。

「鶴沼の松の敷波ながめつつ 我は師走の鷺を聞く」1941.12 病床にて

晶子の愛した鶴沼の松は、おそらく明治後半になってから鶴沼海岸別荘地の開発によって植栽されたもので、歴史は浅い。1882(明治15)年に測量された地形図を読むと、砂丘上にしか松林(針葉樹林記号)は見られない。現在「鶴沼松が岡」などという住居表示がつけられた一帯は、ほとんど不毛の砂原で無人地帯だったのである。

しかし、「本村」と呼ばれた鶴沼北西部では、松林は屋敷林としても一般的だった。『鶴沼』98号の拙文で紹介した森 志げ女が『青鞥』創刊号に寄稿した『死

の家』には、「松の木の多い鶴沼村でも、此松は優れて大きく高いので、乳母は自慢してゐたのである。」と出てくる。

海岸沿いのクロマツ砂防林は、大正関東地震の際に起こったフィリピン海プレート¹の跳ね上がりによる鶴沼海岸で90cm程度の地盤隆起に伴う海退で砂浜の面積が拡がり、飛砂の害が増えたことによる。1928(昭和3)年の神奈川県による昭和天皇御大典記念事業の一つとして大規模な魚附海岸砂防林造成が行われた。その後、湘南遊歩道路(県道片瀬大磯線→国道134号)が敷設され、観光地開発が進められた。ところが、戦時中にクロマツが資源として注目され、松根油採取^{しょうこんゆ}のための伐根、燃料用の盗伐が行われ、飛砂の堆積により湘南遊歩道路が通行不能になるほどだった。この状態は敗戦後間もなく駐留米海軍の重機を用いた作業により短期間で復旧し、県は茅ヶ崎にあった海岸砂防事務所を鶴沼に移し、湘南砂防事務所と改名して活動を再開した。

1959(昭和34)年には皇太子殿下御成婚記念植樹も加えられたが1961(昭和36)年の第2室戸台風、1966(昭和41)年の26号台風による強風や潮風、さらにこの間の異常乾燥やマツノザイセンチュウ(学名：*Bursaphelenchus xylophilus* (Steiner & Buhrer) Nickle)によって、国道の南側を中心に壊滅的な被害を受けた。

鶴沼に見られる松(二葉松)はクロマツ(学名：*Pinus thunbergii*)である。本州に分布する二葉松には他にアカマツ(学名：*Pinus densiflora*)があるが、海岸から20km程度内陸に入らないと自生が見られない。クロマツは1970(昭和45)年10月1日藤沢市の市の木に制定された。また、湘南海岸は日本の松の緑を守る会から1987(昭和62)年「日本の白砂青松100選」に選ばれ、湘南海岸のマツ林は神奈川県環境農政部森林課から1989(平成元)年「かながわの美林50選」に選ばれている。

戦後もしばらくは、箆を背負い熊手を持って松林に松葉掻きに行く光景が見られた。竈や風呂の燃料にするのである。松葉は油分が多く、火力はあるが煤がつきやすいのでやっかいだった。都市ガスの普及と共に松葉掻きの光景は消えた。松葉掻きの光景が消えたことによって消えたのがショウロ(学名：*Rhizopogon rubescens*)である。腹菌亜綱イグチ目ショウロ科に属するキノコで、小さいジャガイモのような子実体は春と秋、海岸などのクロマツ林の幹から少し離れた地上に、聚状に砂に埋もれた状態で発生する。松の枝先から落ちた露から生じたように見えることから松露と名付けられたという説がある。独特の芳香があり、高級食材として珍重された。拙宅の庭でも、1950年までは採集できた記憶がある。この年に東京に一時転居し、3年半後に戻ったら消えていた。湘南砂丘地帯の特産

物として、辻堂駅の開業当時、ハマボウフウ(学名：*Glehnia littoralis*)と共にホームで売られたと聞く。ハマボウフウも一時姿を消し、1979(昭和54)年4月17日に伊藤節堂会員が鵠沼海岸のサイクリング道路で再発見したことが『鵠沼』9号に紹介されている。現在、辻堂の愛好者団体「湘南みちくさクラブ」が復活に熱心に取り組み、成果を得ている。藤沢宿の老舗和菓子店「豊島屋本店」では、銘菓「浜防風」が参勤交代の土産として有名で、ショウロの香りを生かした「松露羊羹」は、1914(大正3)年の大正博覧会や1922(大正11)年の平和博覧会などで金牌を獲得、葉山御用邸御用達となった。これらは現在でも製造販売されている(「浜防風」は注文生産)。

鵠沼のクロマツ林に生える食用キノコとしては、ハツタケ(学名：*Lactarius hatsudake*)、アカハツ(学名：*Lactarius akahatsu*)も記録されているが、筆者は認識していない。マツタケ(学名：*Tricholoma matsutake* (S.Ito et Imai) Sing.)は主にアカマツ林に生えるため、残念ながら鵠沼にはない。

クロマツ林の生態系は、かなり様々な制約が加わるため下草は貧弱で種類も限られる。そうした中でラン科ではハマカキラン(学名：*Epipactis papillosa* var. *sayekiana*)とクゲヌマラン(学名：*Cephalanthera erecta* var. *shizuoi*)がほぼ同様の環境下で生育する。ことにクゲヌマランは、標準和名に鵠沼がついた唯一の生物なので、鵠沼を語る会の諸先輩が熱心に取り組んでこられた。会誌『鵠沼』の16、88、93の各号に詳細な成果が掲載されている。塩澤、諏訪、番場各氏による「再発見」は辻堂地区だったが、現在は鵠沼地区内でも自生が確認されている。

1989(平成元)年に架け替え工事が完成した境川「境橋」(江ノ電鵠沼駅東方)の欄干にはクゲヌマランのレリーフが飾られている。

源海上人とぐみ アキグミ

北原白秋作詞による名歌(中山晋平と山田耕筰が曲をつけている)に『砂山』がある。「向こうは佐渡よ」の歌詞で判るように、旧信濃川河口付近の寄居砂丘の風景を詠ったものだ。3番の歌詞に「かへろかへろよ、茱萸原^{あきぐみ}わけて」と出てくる。グミ科グミ属には国内に自生する種が16種(亜種を含めると26種)報告されているが、海岸砂丘に自生する種としてはアキグミ(学名：*Elaeagnus umbellata*)が考えられる。寄居砂丘では明治初期に砂防のためにアキグミを植栽したとあるから、茱萸原わけてと詠むほど繁茂していたのであろう。

鵠沼をはじめとする湘南砂丘地帯では、茱萸原わけてという風景は見られなか

った。あまりアキグミの自生も記憶に残るほどのものはないようだ。さほど気にするようなことではないが、先日万福寺の荒木良正老師(語る会会員)が『藤沢史談』第十号に寄せた「万福寺をめぐる伝説」の中に次の文があるのに出会った。

「源海上人とぐみの木——源海上人が師命を奉じ、高田の専空上人と共に、立川流の邪義を破すべく、奥州に下向した時、砥上ヶ原でぐみの木の枝で目を突き刺し、ひどく悩んだことがあった。後に上人は、「わが門徒たらん者は、忘れてもぐみの木を植えるな」と誡めたので、鶴沼付近ではぐみの木を植える者はなく、また、植えても育たないそうだ。」

源海上人とは、前項でも若干触れた万福寺の開基荒木源海のことである。源海は藤原鎌足の末孫で俗姓日野真夏11世安藤駿河守隆光と称する武蔵国豊島郡荒木村(現・埼玉県行田市)を領する鎌倉時代の坂東武者で、武州児玉党の随一といわれていた。隆光は二児が同時に死去したのに落胆し出家し、常陸笠間の稲田の草庵に親鸞を訪ねて、直弟子となったという。1245(寛元3)年故郷へと志したとき、聖人の形見として、聖徳太子自作といわれる太子像(木像)を譲られた。帰りの途中中江の島の岩屋に参籠し、夜の波間に浮遊する光るものを取り上げ、立像の阿弥陀如来を感得したとされる。霊場をもとめて砥上ヶ原にきた源海は、鶴(クグヒ・白鳥)の棲む沼地の一方を埋めて、一字を創立し鶴沼山万福寺と号し、かの尊像阿弥陀如来を安置し、開基創建したと語り継がれている。後に関東六老僧の一人に算えられた。

さて、前項でも触れたように1960年代湘南海岸のクロマツ砂防林は、度重なる台風、異常乾燥や虫害によりかなりのダメージを受けた。1983(昭和58)年から神奈川県藤沢土木事務所は、横浜国大宮脇教授の指導により常緑広葉樹をクロマツの下や南側、混交密植を開始し、全国初の例として成功した。これに用いられた常緑広葉樹がアキグミ、ウバメガシ、スダジイ、モチノキ、タブノキ、ヒメユズリハ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、ヤマモモ、カクレミノ、ネズミモチ、トベラ、マサキ、シャリンバイの計15種である。源海上人はこれをどう見るだろうか。

蓮池の絶滅危惧種と外来種 ウシガエル アメリカザリガニ デンジソウ アゾラ

川袋低湿地と蓮池の形成史については、『鶴沼』85号の拙稿で述べたが、生物相について若干補足しておきたい。

ここは、今や砂丘地帯の中の水辺の自然を垣間見ることができる貴重な場所である。高度経済成長期に入る頃、一時粗大ゴミ捨て場状態になり、これに心を傷

めた方々は、定期的に池の清掃を行うと共に、市当局に公園の開設を働きかけた。この間の事情は『鵠沼』85号に桑原玲子会員が報告されているし、その後の事情は『鵠沼』98号に吉田敏平氏が述べられている。吉田敏平氏はこの運動を終始リードされ、現在も「ハス池の自然を愛する会」の代表者として活躍しておられる。この時のお話を機に鵠沼を語る会にも加わられた。

さて、蓮池を訪れると、ウシガエルの不気味な鳴き声に驚かされることがある。子どもたちがマッカチン(アメリカザリガニ)採りに興じる姿もよく見かける。しかし、ウシガエルもアメリカザリガニも北米生まれの外来種である。これらがこの池に出現した歴史は案外古い。

それは1938(昭和13)年7月に遡る。一般的に知られる経緯は次のようなものだ。

ウシガエル(学名：*Rana catesbeiana*、英名：Bull Frog)は北アメリカ原産の大型のカエルで、高級食材に利用されたため「食用蛙」の別名で知られる。

これが日本に入ったのは1918(大正7)年4月18日、東京帝大の渡瀬庄三郎教授が米国ルイジアナ州ニューオリンズから12つがい24匹を輸入したのが最初とされる。輸入したウシガエルは芝白金の東京帝大附属伝染病研究所の池に放養し、卵を得た。飼育に携わったのは、河野卯三郎助手らである。翌年秋には数百匹に増え、1920年9月、農商務省菖蒲囑託からの懇請により、これを茨城県と滋賀県の両水産試験場に分譲した。以来、国指導の副業奨励事業として養蛙が全国的に普及した。

1920(大正9)年、横浜で七宝焼などの貴金属貿易商を営んでいた河野芳之助が、弟の河野卯三郎助手を通してウシガエルを入手し、卯三郎の県立横浜第一中学校(現、横浜希望ヶ丘高校)の同期生だった鎌倉郡^{おさか}小坂村岩瀬(現鎌倉市岩瀬)の素封家・栗田繁芳から水田を借用し、民間初の「鎌倉食用蛙養殖場」を開設した。

かくして鎌倉養殖場は米国ニューオリンズの Southern Biological Supply 社から種蛙を直接輸入し、国内はもちろんのこと、遠く北米にまで The Kamakura Bull Frog Farm として知られるようになった。その分譲した蛙は、北は樺太から南は台湾にいたるまでの全県にわたり養殖されたという。

だが、生きた昆虫や魚を食べる食用ガエルの餌の確保は難題だった。そんな中、鎌倉食用蛙養殖場を経営する河野芳之助は、1927(昭和2)年3月初旬横浜発の春洋丸で渡米し、ウシガエルの餌としてアメリカザリガニ(学名：*Procambarus clarkii*、英名：Red swamp crawfish)が用いられていることを知る。早速、ウシガエルと共にアメリカザリガニ100匹を入手し、ピヤ樽に詰めて1927(昭和2)年5月12日横

浜入港の大洋丸で帰国し、早速鎌倉食用蛙養殖場に持ち帰ったが、ザリガニはわずか20匹になっていたという。余談だが、この日本上陸にちなんで5月12日を「ザリガニの日」として登録した団体があるらしい。

鎌倉食用蛙養殖場で増殖されたウシガエルは、欧米諸国にかなり高値で輸出されたという。国内需要は期待ほどは伸びなかったが、高級料理店などに販売された。ところが1929(昭和4)年に始まる世界恐慌で輸出が急激に落ち込み、さらに日本の軍国化に伴う国際的な経済封鎖により完全に行き詰まった。養殖場の閉鎖が何年かは明確ではないが、その前後から逸出したウシガエルやアメリカザリガニは、養殖場脇を流れる砂押川を経て、下流の大船の水田地帯に拡がった。

※参考・引用文献＝酒向 昇：「食用蛙とアメリカザリガニ——その渡来年をめぐって——」『採集と飼育』第49巻第9号

1938(昭和13)年7月2日、梅雨明けの集中豪雨が神奈川県東部を襲った。鶴沼で育った75歳以上の方ならば記憶に残っているであろう最大の豪雨である。氾濫した境川の水は川袋低湿地全面を覆い尽くした。この氾濫水により大船の水田地帯のウシガエルやアメリカザリガニが柏尾川を経て流れ込み、川袋低湿地に居着いたのである。鶴沼ではこの年からウシガエルの鳴き声を聞くようになった。

その後、鎌倉食用蛙養殖場跡地はもとの水田に戻ったが、そこに1979(昭和54)年3月12日に「いわせ下関青少年広場」が開設された。一時期「アメリカザリガニ発祥の地」なる看板が立てられていたが、今は見られない。大船の水田地帯をはじめ、柏尾川、境川下流部の水田地帯も1980年頃までに姿を消したため、鎌倉食用蛙養殖場から逸出したウシガエルやアメリカザリガニが生存するのは、川袋低湿地に残る蓮池と呼ばれる二つの池だけになったのである。

アメリカザリガニは子どもたちの釣りや飼育の対象となったせいか、その後瞬く間に全国に生息範囲が拡大した。DNA鑑定が行われるようになった結果、宮崎県のザリガニが神奈川県から伝来したことが判明したそうである。

ウシガエルは2006(平成18)年、外来生物法により特定外来生物に指定され、世界の侵略的外来種ワースト100にも指定されている。

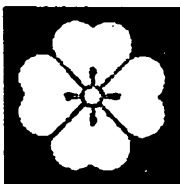
これら2種の外来種が70年以上も生息し続けてきた蓮池の生態系は、かなりアンバランスで不安定なものと考えられる。自動車道路に面するため、単に粗大ゴミ捨て場化したのみならず、様々な生物のゴミ捨て場にもなってきた。ここ数年、ハス池の自然を愛する会、藤沢メダカの学校をつくる会、藤沢市教育文化センター、日本大学生物資源科学部などが生態調査を行ってきたが、きわめて不安定な

調査結果が報告されている。これまでにアフリカツメガエル(学名：*Xenopus laevis*)、グッピー(学名：*Poecilia reticulata*)、ブルーギル(学名：*Lepomis macrochirus*)、キンギョ、錦鯉など、思いもよらぬ生物が発見されているが、ウシガエルとアメリカザリガニ以外はいずれも短期間で消滅している。在来種と思われるギンブナ(学名：*Carassius langsdorfii*)、モツゴ(学名：*Pseudorasbora parva*)、ドジョウ(学名：*Misgurnus anguillicaudatus*)、マルタニシ(学名：*Cipangopaludina chinensis laeta*.)、メダカ(学名：*Oryzias latipes*)などはかなり変動があるものの年々減り続け、これに代わって近年はミナミヌマエビ(学名：*Neocaridina denticulata denticulata*)が増加する傾向が見られる。

桜小路公園が開設され、植栽の管理が行われると、一時姿を消していた鳥類、昆虫類が戻ってきた。カルガモ(学名：*Anas poecilorhyncha*)、コサギ(学名：*Egretta garzetta*)、コヨシキリ(学名：*Acrocephalus bistrigiceps*)、カワセミ(学名：*Alcedo atthis*)が姿を見せるようになった。ギンヤンマ(学名：*Anax parthenope*)、オニヤンマ(学名：*Anotogaster sieboldii*)も増えた。

植生の面でも、湘南砂丘地帯でおそらく唯一残された自然形成に起源を持つ(あまりにも人工の手が加えられ過ぎたため、河跡湖とは言い難い)池沼であり、ヨシ(学名：*Phragmites communis*)やコガマ(学名：*Typha latifolia*)に加えてタコノアシ(学名：*Penthorum chinense*)の自生もわずかに認められる。

デンジソウ(学名：*Marsilea quadrifolia* L.)は、4枚の小葉が葉柄の先に十字状につく水生のシダ植物で、北海道(極稀)、本州、四国、九州、奄美大島に分布。神奈川県では小田原市・秦野市や中井町の一部を除いて、他の区域では見られなくなっている。1969(昭和44)年、鶴沼藤が谷の蓮池で自生が発見され、湘南砂丘地帯唯一の自生地であるとして話題になった。1995(平成7)年発行の『神奈川県レッドリスト生物調査報告書』に「シダ植物のデンジソウは昭和50年(1975)までは鶴沼女子高校の裏手の湿地に生えていたが、ここも埋め立てられて失われた。」とあり環境省：絶滅危惧II類(VU) 神奈川県：絶滅危惧種(En)に指定されている。蓮池のデンジソウは、絶滅寸前に地元の植物愛好家の手で保護され、現在神奈川県立フラワーセンター大船植物園などで保護・繁殖が続けられている。



和名は葉の形が漢字の〈田〉の字を連想されるからとされるが、中国でも〈田字草〉であり、中国名が先である可能性もある。シンプルな形は家紋のデザインにも採用されており、この家紋を持つ名家=四条家(公家)は、明治末期鶴沼に別荘を持っていた。

環境省：絶滅危惧II類 神奈川県：減少種(V)に指定されたオオアカウキクサ(学名：*Azolla japonica* Franch. et Savat)は、蓮池をはじめ藤沢市内の水田や池沼ではしばらく見かけなかったが、2006年になって再生が認められたと思われた。*Azolla* 属は世界で数種、日本の在来種は2種報告されているが、いずれも酷似していて素人には同定が難しい。在来種は繁殖力が弱く、絶滅危惧種に指定されるまで減少した。ところが、合鴨を活用したアゾラ農法などで持ち込まれた外来種は繁殖力が強く、たちまち水面を覆い尽くしてしまう。

2006年には鶴沼高校よりの通称「第一蓮池」だけに見られたが、2008年になって、これが桜小路公園の「第二蓮池」の全面を覆い、新聞にも掲載されるほどになった。専門家の調査により、これは特定外来生物の第二次指定対象種アメリカオオアカウキクサ(アゾラ・クリスタタ 学名：*Azolla cristata* Kaulf.)だということが判明した。これと前後して全国各地の池沼や城の濠などが赤く染まる現象が次々に報道され問題化した。

蓮池では「ハス池の自然を愛する会」や「KFP鶴中おやじの会」などがアゾラ除去に熱心に取り組み、かなり減少させることに成功した。

今年7月24日、ハス池の自然を愛する会と藤沢合唱団の共催で、蓮池の自然を題材にした合唱曲を発表する「はす池・コーラスの集い(2010)」が開催された。

鶴沼枝額蟲とは ホウネンエビ

インターネットの検索エンジンは現代文明の利器である。

『鶴沼』86号の拙文で、杉原千畝にヴィザを発行されて、無事にイスラエルにたどり着いたユダヤ人2139人のデータベースに「KUGENUMA」という苗字の人物が2組4名もいるという検索結果のサプライズを紹介した。

筆者は日常的に「鶴沼」をキーワードに検索をする機会が多い。幸いなことに全国を探してみても藤沢市鶴沼地区以外に鶴沼と名のつく地名はない。

ところが中国および台湾のサイトで鶴沼に出くわして驚かされる。中国では「聶耳終焉の地」を紹介したものが含まれるが、多くは鶴沼枝額蟲を紹介したものである。これはホウネンエビの学名 *Branchinella kugenumaensis* を中国語訳したもので、「學名為*Branchinella kugenumaensis*，又稱為豐年蝦或仙女蝦，正式名稱為鶴沼枝額蟲。是由石川千代松博士在1895年以發現地神奈川縣鶴沼村來命名發表」などと出てくる。この命名については伊藤 聖氏が『鶴沼』77・78号で報告されているので参照されたい。

(わたなべ りょう)

鵠沼にはびこる特定外来生物

二〇〇四年に制定された外来生物法で特定外来生物に指定された生物のうち、鵠沼で問題化した例。

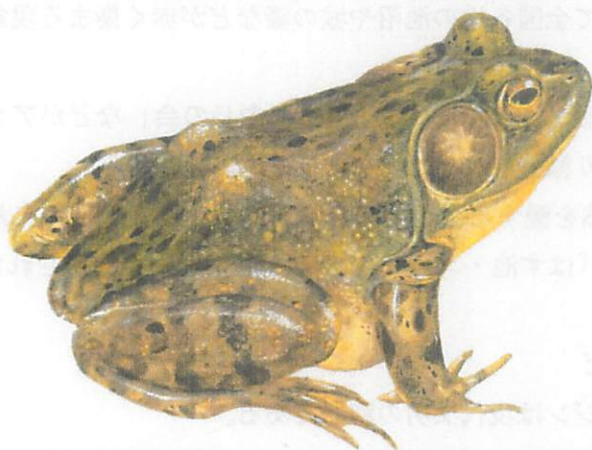
オオキンケイギク

日本への侵入は明治初期という。乾燥した砂地にもよく育ち、庭園にも栽培される。鵠沼海岸一丁目で。



ウシガエル

巨大なオタマジャクシは容易に見ることができ、親は鳴き声ばかりで、姿を見つけるのは困難。



アゾラ・クリスタタ

二〇〇八年、蓮池の水面を埋め尽くして人々を驚かせた。熱心に駆除が取り組まれ、ほぼ根絶できた。



林達夫氏のお住居拝見

(雑誌『スタイル』昭和14年8月号)より転載

林達夫氏のお住居は相州鶴沼。小田急に乗って行けば、鶴沼海岸の一つ手前 本鶴沼で降りたところ。その白い駅名だけのやうなさびしい停車場を出ると、すでにその辺は櫟林や松林や、雑草の繁った野原や、樹間にみえる住宅やの、海浜特有の砂を含んだ野道です。

おくれて来た夏が、二三日前から急に汗ばむ暑さをもってきた六月半ばの日でしたが、砂埃に靴を真っ白にしながらその小道を歩いて行くと、すぐ手にとるやうなところで、鶉や雲雀が、まるで四月頃の長閑さで、今を盛りとないてゐます。

そんな道を五六丁も歩いたところに、濃い緑のかげに落ち着いたマロン色の林氏のお宅がありました。

この林氏のお家といふのは実は「ハウス・アンド・ガーデン」や「プレジュール・ド・フランス」等の外国雑誌の写真だけでみてゐたあの半分茶色の柱の出でゐるハーフ・チンバ式の英吉利市民風の建物で、それが実際に、この鶴沼の一隅で見ることができるものなのです。

□□□□□□□□□□□□□□の農家をお買ひになって、その材料でお建てになったのださうで、日本の田舎家に英国の農家風を肉付けしたものです。勿論その外観だけでなく、その内部の様式、ファニチュア調度品等どんなデテールに至るまで、すべてオールドイングリッシの様式にあはせてお作りになったものです。

林氏のお話では「素人の工夫を出さずに、大体格式にあふものを、専門家を煩はさずにやってみた、一つの実験だ」とおっしゃるのです。しかも、なるべくこの辺の田舎の職人を使ふやり方で、すでに一年余奥さまと二人で、柱の塗をなすったり、床板の張をなすったりして、この家が出来上がったのださうで、「私はもっぱら細部の仕上げの方で、家内は力仕事の方です」と林氏はニッコリなさいます。しかしこの様式が完璧になるまでには、五ヶ年計画なののださうでして、まだこれからなのだといふことでありました。

先ず黄ばんだ茶褐色の玄関を入ると、突当りに小ホールがあります。黒褐色の太い梁の半分出てゐるハーフ・チンバ風の天井、樺の大黒柱、茶褐色の板戸、ホールの真ん中にはチューダー風の椅子、卓子、すべて暗褐色のルネッサンスの色調です。

これらの卓子、椅子、扉、板戸代りの嵌板等の意匠様式は、いづれも十六七世紀の市民様式を取り入れたものださうです。

壁にはボッチチエリイの「春」の版画、レンブラント、レオナルドの肖像画が掛けてゐます。すぐ一方はヴェランダになって庭につづいている。

このホールといふのが、食堂にもなれば、お客ともお会ひになり、またご休息のところでもあり、ここがこの家の最も日常的な楽しい場所なのです。かうした楽な生活様式が、そもそもこの英吉利市民風のスタイルなのださうです。まことに堅牢で комфォタブルな……こんな様式をクロムエリヤン風といふのださうですが、この様式は一体に頑丈で、安易さもあり、質朴で堅実で、なんともいへぬ西洋田舎家の気分が溢れてゐるのです。

部屋の片隅には、この家の田舎家だった時の、箆笥や徳利や糸巻きなどまでが、そのままここに移されてゐます。蓄音器は電気仕掛けでない、わざと手で巻く蓄音器のやうです。

ジャコビヤン様式だといふ取りはずしのきく板戸代りの奥がお書斎です。二方に広い窓をとった三十五坪程の大きなお書斎。この書斎の様式はすべてゴシック風です。

ホールと同様に暗褐色の階調なのですが、その広い窓いっぱいには掛けられた燦んだ赤い木綿のカーテンと同じ色の木綿の網のカーテンの赤がこの渋いお書斎の雰囲気に一種甘い派手さを色づけてゐます。

「あの赤がなかったら、ここは実に索然としてしまうのですが……」と林氏はおっしゃいます。この書斎の中央窓によせて、やはり以前の田舎家にあった神棚からお作りになったといふ樺の大きな机。その机の形は修道院風のデザインだといふことです。その机の他にもう一つ窓際に同じやうな机があります。この手前のが自分の机で、あの窓際のは動物とか植物とか、園芸や昆虫のことを調べる机、と林氏のご説明です。それらの机を囲って種々な意匠の椅子、長椅子の類があります。長椅子はカトリックの教会のベンチを模した木製の長椅子です。椅子はノルマンデーの農家風の椅子ださうです。机の脇には小さい珍しい形をした卓子があります。シューメーカー・ベンチといふのださうでして三本脚で抽出しのつい

たベンチです。これは英吉利の靴直しのベンチださうで、これに馬乗りにまたいで仕事をしたものださうです。

このベンチがまた踏み台にもなれば、卓子にもなるので、こうした気楽な様式がすべてそもそも英国市民風なのだとおっしゃることでした。

この書斎につづいて奥さまの小さい寝室があります。奥さまがご自分で図をひいておつくりになったといふ寝台、その寝台が十六七世紀に出てくる型ださうでして、その彫りの飾りはリネン・ホールドといって、ドレスのドレープ（襷よせ）のやうな優美で繊細なデザインです。

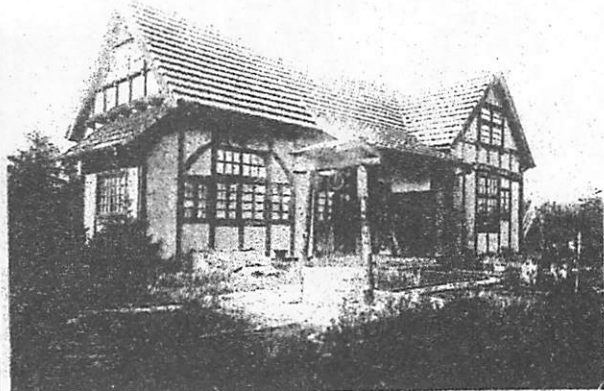
こんなお住居拝見は、もうちょっとどこでも出来さうもないので、このアンティーク・モダンなお住居拝見をもっと詳細にご報告したいのですが、紙数がありませんので、すぐに庭の説明に移ります。

このオールド・イングリッシの建物の庭には花と薬草を植えるのださうです。そのイングリッシガーデンに降り立てば庭いっぱいに香料や染料の薬草が生えてゐます。

修道院のそれのやうな珍しい井戸。井戸のそばには沢山の薬草の鉢。林氏はお仕事のかたはらこの庭でフランスの民間薬のご研究をなさっていらっしゃるのださうです。「舞踏会の手帳」にでてくるイタリアン・サイプレス（糸杉）が植つてゐたり、ミモザや食用アザミや珍しい植物でいっぱいです。

林氏のお友達が「ファブル植物園」と名付けた庭です。真紅のオールド・ローズが一輪見事に咲いてゐました。

（館 真）



林 達夫邸について

林 達夫の住まい（藤沢市鵠沼桜が岡 2-1-26）は、『日本近代建築総覧』日本建築学会編や『神奈川県の実存近代洋風建造物目録』神奈川県教育委員会編にも記載されている建築学的にも貴重な保存すべき住宅の一つである。

かつて『鵠沼 第 83 号』に『婦人公論 昭和 13 年 10 月号』に「私の家」と題して林達夫自身の文章で自邸が紹介されているものを転載したことがある。

いまから 4 年ほど前、この敷地が借地であったため地主から返還要求があり、地上権との相殺で庭の部分を返済することになった。そのとき今回転載の雑誌『スタイル』の記事のコピーを次男杲之助氏から頂戴し、同時に邸内を見せて頂いたのだが、長男巳奈男氏が遺された蔵書がどの部屋にも山積となり、内部の写真を撮れるような状態ではなかった。真弥子夫人のお話では、複数の大学や図書館が受け入れたいと希望しているようで、それが片付いたらお知らせします。と言って下さっていたのである。夫人は約束を忘れず、今春、「本が片付きましたからどうぞ」と電話を下さったので、早速、会員有志でお宅に伺って撮らせて頂いたのが以下の写真である。なお文中にある庭の部分は、今風の住宅が 3 軒立ち並び、当時の面影をしのぶべくもない。（写真撮影：佐藤弘、渡部瞭、岡田哲明）



玄関脇の石塀と門



正面玄関



太い柱や梁が黒光して高い天井や壁の白漆喰との対比が美しい



高窓にはステンドグラスが



素敵な家具



飾り暖炉のある小さな応接



中二階のある夫人室

花 弁 の 虚

今井 達夫

1

「お別れしたくなくなりそう……」

腕のなかで、晴子がささやいた。厚いはだかの胸に伏せている顔の表情は見えない。熱い頬がその代りをしている。頬ばかりではなくからだ中の皮膚も。

「……」

限本は口をひらかなかった。応答すべき場合ではなかった。また、どれほどの真実を籠めているのかもわからなかった。晴子がその中に沈んでいる余韻を尊重してやるだけの方が、この場合では礼儀かと思う。

しばらくそのままにしていってから、限本は腕を抜き寝床からすりぬけて、座敷から広縁へ出た。まだ暮れきらない春の相模湾が、ひろくかすんでいた。江ノ島の旅館の西に向いた二階である。座敷も海もしんと静かだ。

広縁の壁に洗面台があった。限本は音を立てないよう気をつけてうがいをし、タオルを濡らして顔の脂をぬぐった。籐椅子に腰をおろしてタバコに火をつけてからもう一度目をやったが、相模湾もそのかなたの箱根連山や伊豆半島も遅々とした日差しのなかで風景の変化を見せなかった。

別れ話を持ち出したのは、限本の方ではなかった。浮気は一年半つづいたが、浮気が始まる時、君に結婚相手ができるか恋人ができるかしたら別れるよと限本はいった。晴子は限本と商売仲間の会社につとめている未亡人で、そういう協定を肯定する二十七歳の身軽な環境の持主だった。こんど結婚する相手ができたと打ちあげたので、限本は詳細を聞くことなしに協定にしたがったまでのことである。

別れたくなくなりそうとは、かの女の方でも礼儀をつくす言葉だったかも知れない。いや、そうでなくては困る。本気でいわれてはうっとうしい。グッドタイミングとは晴子の方でもかんじていたはずだ。お別れのランデヴは江ノ島にしましょうよ、弁天さまはやきもち焼きで男と女が切れるように呪文をかけるという

ことだから、——そういったのも晴子だった。

最後だと思うから寝床の技術に念を入れすぎたかなと、隈本は苦笑いしたが、まさかとあたまを振った。それほど幼稚な女にはしておかなかったはずだ。

たそがれの色が海の面にひろがると、ガラス戸を通して肌寒さがゆかた一枚の肩にせまって来た。隈本は籐椅子を立った。座敷ではきっちりと着物を着終わった晴子が、鏡台にむかっていた。

「さっきはごめんなさい。もう、大丈夫。」

鏡のなかで目を合わせ、晴子はさらっと笑って見せた。

旅館を出て、長い桟橋をわたり、ロータリィで車をひろい、藤沢へ向かった。駅で晴子をおろし、隈本はそのまま乗りつづけた。これでさばさばとした別れの完成だ。しばらく休養期間をおこうと思うのは、たびたび女と別れたあとにおぼえる安らぎがたのしいからである。隈本は東京まで車を走らせ、芝公園に近い高級アパートへ帰りついた。妻と別れてからずっと、——いや、言葉を飾るまい、妻に逃げられてからずっと一人暮らしだが、このアパートに住めるようになったのはその後のことである。三十八歳の事業家としては、過不足のない、しかし、はた目には贅沢なアパート生活と見えるだろう。

浴室の湯を出し、それから着替えをし、街の灯の見える窓辺で、隈本はタバコを吸った。

「ウム、そうか。」

テーブルにおきっぱなしにしておいたすしの折を、念のため冷蔵庫の入れておこうと立ち上がると、今しがたは気のつかなかったメモが目に入った。毎日正午から二時間働きに来るヘルパアの書き残して行ったもので、電話があつてこの番号へかけて欲しいという伝言だった。

知らない電話番号だった。が、ここの部屋の電話番号は限った人にきり教えない。限った人になれば応答しなければならないが、今は億劫だった。それに、正午過ぎの電話とすれば、もう時間がたちすぎている。この局番は中央区内だ。事業関係ならもちろん相手はもういない。隈本は億劫な心持ちをそんな理由にこじつけることで受話器をとりあげるのをやめ、すしの折を冷蔵庫に入れるはじめの目的の作業をした。

バスにひとりながら考えたのは、晴子へのプレゼントだった。一年半いい愛人だったかの女に何を贈ればいいのか。あまり贅沢な品物ではよくあるまい。地味な結婚をすとなれば、良人に疑いの種を蒔いてはいけない。むしろ、銀行の預金

帳にするか。とすれば、いくらぐらいが妥当だろう。

バスを出て水割りをつくり、窓から風を入れてタバコをすった。いくらもたたないうちに、ブザアが鳴った。眉をひそめながら時計を見ると、十一時に近かった。こんな時刻に訪ねて来る客はない習慣である。うごかないでいると、また、今度は性急な鳴らし方でひびいた。隈本は、不機嫌な顔のまま玄関に出て、ドアを開けた。

いきなり原色のまじりあった色彩が、目にとびこんで来た。うすいオーバアを引っかけた恰好の女だった。

「あたしよ。わからないの？大事なことを教えてあげに来たの。大事なことよ。」

立ちはだかつている隈本を押しつけてはいりこんだのは、六年前までは妻だった三岐江だった。

「帰ってくれたまえ。君と逢うわけにはいかん。」

「何いってんのよ、親切でやって来たのに。今日やっとここが分かったのさ。晴子って女とつきあっているのは前から知っていたけど。咽が渴いた。これもらわ。」

居間まではいりこんだ三岐江は、目にとめた水割りのタンブラアをつかんで、ひと息で底まで飲んだ。

「贅沢なの飲んでるんだな。そういえば、あんた当てたのね。買ったの、ここ。」

「帰ってもらおう。」

部屋を見まわす三岐江に距離をおいて語気を強めた。

「晴子って女は、あんたとつきあっていないながら、ほかの男と遊んでいるの知ってる？確証があるんだ。気をつけなければダメよ。」

そんなことを告げ口する資格があると思うのか、——口から出かかった言葉をかみ殺して、隈本は、前と同じ言葉をくりかえした。

「話がすんだら帰ってもらおう。」

2

三岐江を追いかえし、かの女が口をつけたタンブラアをキッチンで洗おうとした隈本は、ガラスに口紅がべっとりとついているのをみつけると、急に激するものにおそわれ冷蔵庫の縁で割ってすてた。新しい水割りをつくって居間にもどると、椅子に腰をおろさないうちにこんどは電話のベルが鳴った。まさか三岐江ではあ

るまいがと受話器に耳を当てると、「やあ、隈さんかい？ちょいとすまないことができてしまって、——」

事業仲間であり、唯一の親友といってもいい瀬木の声がひびいて来た。聞いているうちに表情がうごき、

「わかった。ありがとう。しかし、遅かった。たった今追い払ったところだ。」

電話を切るときには、いくらか明るくなっていた。緊急報告だと瀬木のかけて来た電話を要約するとこんなことになる。

三人連れで今夜行ったのは場末の三流どころのキャバレーだったが、そこで三岐江と顔を合わせてまずいなと思ったときは、手遅れだった。連れの二人が隈本を知っていて三岐江を知らない新しい事業仲間だったのがまずかった。隈本さんどうしているという瀬木への質問を横取りしたひとりが、なんにも知識がないままにかの女をひやかし、とめるひまもなく隈本の近況やら住所まで教えてしまったという。

「あたし、ちょいと大事な話があるの。よかったわ、おしえていただいて。ほんとよ、野暮用よ。」

野暮用かどうかかわからないが、押しかけて行きそうな気配をかんじとった瀬木が警告の電話をかけたわけだけでも、まさにそれが遅かったのだ。

場末の三流どころのキャバレー、これは瀬木の説明をきかなくても、さっきひと目見た瞬間想像できたが、隈本は別れて以来逢ったことがないし消息も知らなかったから、そうなるまでの筋道はわからない。わからないが、見当はつく。あの若い男に捨てられたのだろう、——しかし、そのことは隈本にとっては無縁だ。

今夜の出来事は瀬木のいうとおり、偶然にきまっている。なんのために瀬木たちがそんなキャバレーに足を踏み入れたのか、そんな詮索もどうだっていい。たまたまそこに三岐江がいて、三岐江を知らぬ連中がかの女をひやかして楽しんだのだって隈本には無縁のことだ。三岐江はそれで隈本の所在を知り、現在の状態を知って、好奇心かまた何かの成心^{しごころ}を抱いてか駆けつけて来た。あの身なりでは、あんまりパツとしない境遇におかれているにきまっている。成心はそこにかかわりを持つと認めていい。

だから、そこまではいいのだ。三岐江はどうして晴子の存在を知ったのか。いや、これもかまわない、すでに今日別れた女だ。が、最後に残していった言葉は、笑いすてるに少々困難な隈本だった。

晴子がほかの男と交渉を持っている。それはどういうことだろう。隈本は考え

る筋道を別の方へ曲げようとしている自分に気づいて、姿勢を立て直した。それがわるい癖だ。大事なのは、三岐江の放言に実感があつたのをみとめることである。嘘にあんな実感をこめる能力の持主ではないから、隈本に傷を負わせたのだ。どのくらい真相を貫いているかは別として、煙の立つ火種はどこかにあるに違いなかった。隈本の表情がまた陰しくなった。今しがた明るく変化したのは、虚勢のいたすところではなかった。三岐江が小遣いでも無心に來たと思いたがっての虚勢である。

翌日、隈本は瀬木を昼食に誘い出した。

「昨夜のキャバレーはどこなんだ？」

「おや、どうして？ よした方がいいと思うな。」

「わかっている、もちろん。目的は別だ。」

瀬木は首をかしげながら、隈本の知りたいことを教えてくれた。瀬木は十二三年前、隈本が独立する前からの友人で、三岐江との結婚離婚ともに手を煩わしている。親身に心配してくれる友人である。三岐江とのよりがもどるのを心配してくれる気持ちはありがたかったが、事はくりかえすまでもなく別の問題だった。

夕方、表がまだ明るいうちに、隈本はそのキャバレーに足を踏み入れた。指名をすると、三岐江は職業的な愛想笑いをうかべて、

「いらっしやいませ。」

テーブルにあらわれたが、

「訊きたいことがあるんだ。」

ボーイが注文のビールを抜いて去ると、

「何が訊きたいことさ。昨夜はあんなに邪険に扱っておきながら、何しに來たのさ。フン、まあ、いいや。このお客さんさしでくどきたいんだって。十分ほど席をはずして。」

寄って來た女たちを立ち去らせた。

「晴子のことが気になるっていうの？ いい気なものね、別れた女房に訊きに來るなんて。」

「そういうな。晴子とは別れた。」

「ほんとう？ なら、何も訊くことないじゃない？」

「そうじゃない。昨日別れ話のすんだホヤホヤだ。金をやらなければならないが、君のいったようなことがあつたのなら、大分割引できるからね。」

途中考えて來た通りのせりふを口にすると、三岐江は単純に引かなかった。

「そうか。そういう話か。なら、乗ってもいいけど。」

「礼はする。」

「お礼なんか、——ウウン、もちろん只働きって手はないけどね。あたしだって秘密探偵じゃないから、目の前に確証を提出するわけに行かないけど、ヒントだけあげるわ。好村って男、知らない？」

「好村？」

「何をしてる男かいわない。でも、そこからたぐり出してごらん。それこそ、探偵を雇えばいいじゃない？」

「フム。」

眉のあいだに皺をきざむと、ふっとすり寄って来て、耳に口を寄せた。

「あんたの女が、あたしもそうだったけどさ、隠れて浮気をするわけ、わかってる？あんたが変なこと自慢するから、ちょいとためしてみたくなるじゃない？フフ。自業自得よ。それとも、身から出た錆びっていうのかな。考えた方がいいわよ。」

3

別れた女の過去をほじくりかえして何になるのだ、という声が聞こえないのではなかった。しかし、隈本はその声に向かって、耳をふさいだ。さらりと体をかわす爽快な気分よりも、いまいましさの方がつよかった。この場合自尊心という言葉は当たらないのに、それを傷つけられたと感じるのが、隈本の弱点であり泣きどころであった。それには、好村という姓が前から記憶に残っていたためもある。その翌日、隈本は三岐江の示唆に乗って、秘密探偵所を訪ねた。

同時に、晴子にも連絡をとった。晴子はまだ勤め先をやめていなかった。こんど結婚する相手がどういう男であるかも聞かなかったし、いつ結婚するかという質問も口に出していなかったから、江ノ島のランデヴを終止符と受けとっていない顔をつくってもいいのだと、自分を納得させた。電話口で晴子はすこし驚いた声を出したが、さからわずに行きつけのうなぎ屋に出て来た。

都心からすこし離れた高台の店だから、二階の小部屋へ通ると静かな環境だった。上衣を脱いでビールを飲んでいた隈本は、女中に案内されてはいって来た晴子を見て、思わず目をみはった。久しぶりの洋装で、きっちりとした幅広のベルトが描き出している腰のくびれが、今さらのように鮮やかだったのだ。和服好

きの隈本のために逢うときはいつも彼の買ってやった着物に着かえて来るのに、今日は突然だったからだろう。それとも、もう別れた男だから、そこまで気をくばる要をみとめないのか、——しかし、この新鮮な姿態を長いこと目に求めなかったのを、隈本は悔いた。

「どうして、そんなにごらんになるの？ 厭だわ。」

晴子は上目使いに隈本をにらんで、スカートをひっぱりながら、卓に寄った。こんな仕草には、別れ話のすんだあとの出会いとは受け取れないものがある。

「いや、洋服もいいものだど再認識しているのさ。まあ、一杯。」

隈本はビールをついでやりながら、晴子の全身を目で撫でまわした。その言葉に嘘はないが、それだけではなかった。三岐江の告げ口がほんとかどうかまだわからないが、もしほんととすると、この女のどこにそんな能力が隠れているのか見究めたいのである。そんな能力とは隠れて浮気をやりすますことだ。

が、そんな能力があつたって不思議はない。晴子と交渉を持った最初を、隈本は反芻してみた。あれは同業者たちと懇親のために一泊旅行に行った湯河原の宿ではじまった。宴会の途中で東京への電話を思い出した隈本が、座の空気を妨げまいと室内の電話をさけて、ホールの隅の電話に行くと先客があり、それが晴子だった。洋服を丹前に着かえた晴子のうしろ姿と頸筋のあたりに不用意な媚めかしさがただよっているのを見て

「こら、怪しいぞ。浮気の打ち合わせか。」

軽く羽交い絞めにうしろから肩に腕をまわした。

「あら、そういうことがあればうれしいのですけれど。」

晴子は彼の腕から逃げようとしなくて、顔だけ振り向けて見上げた。見上げた目は、そういう方角のせいとか、瞳の白い部分が白く艶を帯びていた。そのとき、隈本は十分の手ごたえと同族感をかんとったのだ。

翌日、隈本は小田原の友人を訪ねるのを口実にして途中下車をしたが、晴子も小田急に乗りかえるとことわって、約束通り下りて来た。協定は半日を箱根で使うに当たって成立したのだ。結婚の相手か恋人が出来たら別れようといったのは、もちろん結婚もしないし恋愛でさえない、ごたごたなしの浮気だよと釘をさしたわけだが、晴子の方もその協定を喜ぶだけの素質の持ち主だった。とすれば、隈本の見抜いた同族感の的を射当てたといっているだろう。

浮気も一年半密着すれば、底をつく。結婚相手ができたとの申し出は、たがいにタイミングが合ったわけだが、それにもかかわらず隈本がよりを戻そうと企て

たのは、未練といっちは常識にすぎる、未練ではなくて、真相を探り当てるまで引きとめておきたいからであった。

「どうだい、三月か半年結婚を延ばすわけに行かないか。」

「それ、どういう意味？」

「意味というほどのことはないさ。ちょいと飽気ない後味だからだ。どうだろう？」

「そうね。そういわれて見るとちょいと飽気ないというの、実感ね。いいわ。」

「よし。これで、協定は成立した。」

隈本は、晴子を膝の上に引き寄せた。晴子は上手にもたれて来た。東京もこのへんだと青葉のにおいが濃く流れて来る。……

秘密探偵所では一週間ごとに報告書をよこしたが、全然成果がなかった。好村という名前まで教えてやったのに、彼にタッチすることさえなかった。しかし、三岐江の口からも聞いたし、隈本自身聞いてもいた。春ごろある洋食屋に晴子といたとき、ボオイがかの女に電話をとりついだが、その名前がヨシムラだった。

晴子は立って行ったが戻って来たときなんの説明もあたえなかった。そのときの晴子の表情を、隈本は目にうかべてみたがこれという変化は思い出せない。

一体こんなまねをして、どうしようというのだ。隈本は自分の態度を客観的に見、矛盾だらけなのを悟った。晴子が浮気をしたのは事実であっても、それを咎める権利はない。咎めれば協定違反になるし、こっちの面子にかかわる醜態になる。また、晴子が浮気をしたからとて、傷を負う自分ではないと思う。それならば、秘密探偵なんかに調査させてもさせなくても、同じことではないか。しかし、それが隈本の性格であった。浮気は傷を与えないかも知れないが、浮気を知らずに見過ごしたことが、彼の自尊心を傷つけるのだ。自尊心などという立派な言葉を持ち出すのは不当で、うぬぼれと言い直した方が正しいだろう。そうなのだ。隈本はうぬぼれ屋であった。それは弱点であり、泣きどころなのであった。

4

三回目の報告書が来て、初夏になった。しかし、今度の報告書も、隈本にとっては空白にひとしい内容きり持っていなかった。そのあいだに隈本は幾度かランデヴをかさねたが、晴子から何かの変化は探りとれなかった。悦楽を求める度合いがはげしくなったという変化はあったが、それが期限付きの延期のためか、隈本の技術に熱が加わったためか、彼には判断がつかなかった。三岐江に逢いに行

ったのは、迷いのためであった。逢いに行ったといっても、キャバレーで時間を過ごしたにすぎなかった。

三岐江はその後アパートへもやって来たが、隈本は用心深く部屋に入れることを拒んだ。何か下心があることを嗅ぎ取ったからである。でんわもかけてきたが、そのたびに、調査中という返事ですぐ切った。これも幾度かくりかえされた。だから、キャバレーへ足を運んだのは、隈本の自信がぐらついた証拠である。

「どうしたの？わかった？」

三岐江は顔を見ると、率直すぎる好奇心を視線にうかべた。

「いや、まだだ。君にもっと詳しい話を聞かせてもらうために来たんだ。君はどうして晴子を知っているのだ？あんなことを誰から聞いたのだ？できるだけこまかく説明してくれ。」

「呆れた。まだもたもたしているの？相手まで教えたのに。」

「その好村というのは、どういう男なのだ？」

「さあ。」

「教えてくれ。」

「教えてもいいけど、——それで確証があがったら、どうするの？別れるの？」

あとの方を耳に寄せ、低い声になった。前にもう別れたといったのを信じていないのは当然だろう。

「まず、こっちの質問に答えてくれ。約束通り十分礼をする。」

「仕様がな。洋服屋なんだ、婦人服専門の。かの女に訊かなかったの？じゃ、よっぽど惚れてるんだな。」

探るような目の色で、距離をつくり、顔を見直した。

「洋服屋か。なるほど。」

「思いあたる？」

「……」

思い当たらないと答えれば嘘になる。しかし、三岐江のいう意味とは別のものだ。それなら、あのレストランの電話に出た晴子もどって来たとき動揺を示していなかったのも当然だ。……

隈本はそれ以上たしかな事情を聞き出せず、肩すかしを喰った気持でキャバレーを出た。が、拾ったタクシイを大分走らせてから、もうひとつ大事な質問を口にできなかったことに気づいた。もっとも、その質問を口に出すについては、迷いがあった。それだから、忘れたといってもいいだろう。いや、忘れたというより、

うまいきっかけがつかめなかったといった方が正しいかも知れない。そして、思い出しながらキャバレーへもどらずに、まっすぐアパートへ帰ってしまった理由はいろいろあるが、結局は自分の内部がさらけ出せない見栄坊な性格のためであった。見栄坊であり、また、会津生まれの東北人特有な内向型の性格が、胸のなかへ踏み込まれるのを嫌う性格をつくりあげてしまったこのごろであった。しかし、それではすまなかった。やはり、三岐江に質問をしなければ現在おかれている解決の必要についての糸口がみつからなかった。アパートから隈本はキャバレーへ電話をかけた。

三岐江はふたつ返事で呼び出しに応じ、隈本の指定した六本木のイタリア料理店へ車でかけつけて来た。

「なんなのさ、また。しっかりしろよ。」

「大きな声を出さないでくれ。ひとに聞かれたくない話だ。しかし、よく来てくれた。これは車代だ。何か食べるか、飲むか。」

「両方さ。」

隈本の渡した一万円札を手早くしまい、ボオイが持ってきたメニューに目をおとした。イタリアの酒は知らないらしく、ビールが来ると、

「ひさしぶりで豪華版だな。いいわ、訊きたいことなんでもしゃべるわ。だけど、何？」

「この前いったことだが、あんなこと教えるとためしてみたくなるって、あれは君の実感か。それで男をつくったのか。」

「なんだ、そんなことむしかえさなくたっていいじゃない？てれるな。」

「いや、今さら君の場合をむしかえすわけじゃない。参考のためだ。」

「じゃ、晴子にも訓練どこしたの？そうか。もちろん、そういうわけだな。それァそういう気になるわよ。だけど、柳橋で教わった秘伝だって説明したの？」

「いや、それは、——そんなことはどうでもいい。そうか。女ってそういうものか。」

ボオイが料理を運んできたので、話がとぎれた。三岐江はがつつと食べはじめた。隈本は視線を宙に浮かせて、キャンティをなめた。

朝鮮動乱がはじまったころだから、十年以上昔になる。隈本はある商事会社の社員だったが、インフレ景気に乗った幹部たちのお供をおおせつかって、たびたび柳橋の料亭に足を踏み入れた。要するに、酒席の小使いで、ある晩、些細な手ばかりから、座に堪えかねる面罵をうけた。しかし、隈本には宴のすんだあと事

務的な用事があって、立つわけにいかなかった。彼ひとり残ると、一人の芸者が、「とんだ松の廊下ね。よくがまんなすったわ。慰労会やりましょう。あたしのうちにいらっしやい。」

と、誘ってくれた。うちといっても、まだ国電に乗って行く市川のアパートだった。姐さん株のその芸者の年はよくわからなかったが、もちろん隈本よりずっと年長で呑んべえだった。肚のなかで会社を辞め独立しようと決心していた隈本は、やけも手伝って酔い倒れるまで相手になった。

「あんた、素質があるわ。仕込んであげる。」

白白と夜のあけるころ、寝床のなかで彼の頸に腕をまわした女が耳朶に熱い息をからませた。それで開眼したのである。おしえをうけると、今までの自分がどんなに幼稚だったかが、はっきりわかった。

5

それが三岐江のいった「柳橋の秘伝」だった。隈本はひと月あまり「手ほどき」をうけ「訓練」された。

「これで、卒業よ。あんたはあたしの見込み通り素質があったわ。」

「いや、僕みたいなぐずが——」

幹部社員から受けた罵倒の言葉だ。

「そう思うなら、ためしてごらんなさい。自信を持つわ。でも、あんまり素人を泣かせては罪よ。さて、これであたしたちはお別れ。」

さばさばと笑った。江戸時代から、役者から芸者、芸者から役者へと相伝した技術だとは、その時はじめて聞かされた。

その芸者のいった通りだった。隈本は自信を持ち、同時に、人生についても自信を持つことができた。「素質」を信じたのだ。うぬぼれ屋になるのは、容易だった。隈本は会津へ帰省し、母と姉を説き伏せ、土地や山林を売って資金をつくって独立した。小さいながら横山町に店を構えた。繊維製品を主としていろいろな問屋のならんでいる横山町だ。

はじめの短期間は彼もインフレに乗り、世話をする人があって三岐江と結婚した。瀬木はそのころからの仲間で、東京に親戚のすくない彼のため、式にまで参列してくれた。三岐江は単純だが気のいい女で、現在にくらべればはるかに品があった。単純なままに自分を中心とし自分本位にきりものを考えることができた

かったが、それだってはじめのうちはむしろ愛嬌のひとつであった。三岐江が不満を云い立てるようになったのは、間もなくインフレが去り反動がおそって来てからであった。放漫商策をとっていた元つとめていた商事会社がたちまち倒産したくらいだから、根の浅い隈本の店が苦境におちいったのは当然だった。

自認しているぐずは、しかし、同時にねばりづよい性格と表裏をなし、辛抱に辛抱をかさねた。瀬木はそのときも励ましあう仲間だった。苦境を切りぬける奔走は家庭をなおざりにさせた。それが三岐江に男をつくらせる原因になったのだが、うすうす悟っていながら、気持ちをそっちへ向ける余裕を隈本は持つことができなかった。そして結局三岐江はそのつまらない男のところへ逃げて行ったのである。離婚について間に入ってくれたのも瀬木であった。それ以来家庭を持つことをやめ、隈本は独身生活をつづけた。母は五年前に亡くなり、妹は結婚して会津に落ち着いているから、系累との面倒は全くないといってよかった。……

「ああ、おいしかった。タバコ頂戴。こうして逢うのも、わるくないわね。こんど旅行しない？」

「それは宿題にしよう。」

隈本は、テーブルの下ですりよせて来る三岐江の脚をはずしながら、立ちあがった。

通りで左右に別れ、アパートへ帰ると、隈本はいつもの通りバスに湯を出した。汗を流して、手製の水割りを飲んでいると、今しがたタクシーを待っているあいだに云った三岐江の言葉が、重量感をもつてのしかかって来た。

「随分御熱心ね。それで、どうしようっていうの？別れたいから？別れるための口実がいるほど深いの？」

三岐江としてはこれも下心のための探りだとわかるが、隈本の方では答案を出さねばならない問題を突きつけられた気持ちだった。答案は、——もちろん三岐江にさしだすのではない、自分自身へだ。

別れ話はすんでいる。それならば、晴子にどんな秘密があろうとも、無関係ではないか。好村か、誰かわからない、仮に浮気の確認をつかんだとしても、今さら責め立てる立場ではないし、いや、はじめからそんな立場は放棄しておいたはずだ。それならば、なぜ確認を求めるのだろう。御熱心だとひやかされれば、頭を下げるほかないわけだ。しかし、隈本は知りたいのだった。三岐江から注ぎこまれた毒は全身にまわっている。真実を知りたいのだった。知れば晴子を掌の上で支配していることになるし、知らない別の世界で晴子が浮気をしたのなら、彼

のうぬぼれ屋は滑稽な形で浮き上がってしまう。要するにうぬぼれ屋を全うしなければ承知できないのだった。この要求が、つまり、うぬぼれ屋であった。

三日後、隈本は晴子を箱根へ連れ出した。断崖の上に立っている旅館のベランダから見えるのは、はるか目の下を青葉がぐれに流れている溪流と、対岸の青い山肌と、廂にふれている椎の大木の青い広がりだけだった。

「ここは涼しいが、随分暑くなったね。夏の洋服を大急ぎでつくらないか。」

持参のウイスキーを水で割って飲みながら、持って回った言い方をした。

「あら、洋服はおきらいだづたはずよ。つくっていただくのは嬉しいけれど、なんだか変みたい。」

「このあいだ見て、なかなかいいと思ったのさ。ベルトでキュッとしめたヒップの線が目には焼きついた。」

これも嘘ではない。

「ヒップ？ ウエスト？」

「ああ、ウエストか。いや、ヒップもまぜてだ。」

「男のかたって、そんなへんばかり目につくのかしら。」

「ちょっと立ってごらん。ゆかたじゃ、線がぼやける。」

向かい合った籐椅子から素直に立って全身の見える位置にうごいた。紺に白で大きく御所車を染めぬいたゆかたに緋子の伊達巻をキュッとしめている、これも持参の品だ。

「ウム、これもいいが、洋服の方がもっとしまるぜ。このあいだの服はどこでつくったのだ？ あの仕立がいいな。」

「あれ？ あれは好村っていう洋裁屋。店を出していないけれど、腕がいいので評判なの。でもね、変な男。寸法を取るのに、からだ中さわるのよ。」

「男か。」

「ええ、和服と同じで、男の方が上手ね。」

「なるほど。」

順序を立ててカマをかけようと思っていたとたんに好村の名が出たので、隈本はわれにもなくドキリとした。好村については、この二日間で秘密探偵に調べさせ、十分知識のある隈本だった。隈本は立って行って晴子の肩、胸、胴から腰まで撫で下ろしながら、

「つまり、こんなふうにさわるのか。」

「厭よ、くすぐったいわ。許して。意地わる。」

晴子は身悶え、しかし、逃げないで、隈本にしがみついた。

6

梅雨にはいつて間もなく、瀬木の呼び出しをうけて、隈本は一緒に晩飯を喰った。

「あんた、今のひとと別れたそうだが、——」

「ウム、が、誰がそんなこといった？」

「三岐江さんがやって来てね。そういうことになったら、よりを戻したい、——あんたにもその気があるから、なかにはいれ、——」

「とんでもない。身勝手もいいところだ。」

「そうだろうな。じゃ、どういっておこう？」

「もう後釜ができていってくれ。いや、待った。話がうるさくなると困る。別れないといっておいてもらおうか。すまない。」

瀬木の用件はそれだけだった。

瀬木と別れてアパートへ帰り、例によってバスにはいつて出るか出ないうちに、電話のベルが鳴った。タオルを腰に巻いただけで、

「モシモシ。」

「あんた、ダメよ。未練がましいじゃない？」

三岐江のオクタヴ高い声だった。

「——どうしたってエのよ。いつまでだらだらかわりあっていたら、あんたの沽券に関わるわ。あの女、完全に裏切ってるのよ。モシモシ。」

「わかった。ありがとう、ご心配かけて。」

「ああら、そんなこと。……」

おしまいまで聞かずに、受話器をおいた。——沽券に関わる、完全な裏切りとは笑わせる。自分の過去を棚に上げて親切を押しつける言葉にダブって、あんた当てたのねと部屋中見まわしながらいったのが聞こえるようだ。瀬木がすぐ連絡してくれたのか、三岐江が結果を知りたがってせっついて行ったのかわからないが、これならピシッと釘をさしておけばよかったと思う。むしろ、望みをおおきくさせたみたいだ。

このままでは晴子と別れても、三岐江に知られないようにとりつくろわねばならぬ。それはうとうしい。しかし、別れるなら早い方がいい。江ノ島でついた

はずの結末をこうこんがらかった状態に持ちこんだのは、あの晩おそってきた三岐江のひと言からはじまった。三岐江にいいようにかきまわされたのがいいまい。早いところ切りをつけるのだ。

みんな架空だった。その後來た報告書によれば、晴子は好村に夏服を三着注文し、好村は晴子のアパートに出入りしているが、それは商売のため以上ではないことになっている。店を持たない洋裁師だから客のところへ出向くのは当然だし、それはみんな彼の指示に晴子がしたがったまでのことである。これ以上三岐江に踊らされるのは滑稽すぎる。'

晴子との関係も、うまい具合にまた飽和状態のすべりこんだ。箱根で好村についての説明を聞かされたときはふと疑いにおそわれたが、あれも三岐江の暗示に引っかかったゆえだろう。そのため、隈本はあらためて晴子のからだに例の「秘伝」をほどこし直し、それが「秘伝」である所以も刺激剤として説明したが、これだって三岐江に踊らされたわけだ。もっとも、そのおかげで現在の別れるにいい飽和状態を作り出せたのだが。翌日、隈本は晴子を食事だけに誘い、今まで訊かなかった縁談について質問をした。晴子はさらりと答えた。八王子のある会社につとめている四十男で、子供がひとりいるという。結婚すれば八王子に住むことになる。その答え方で、晴子も飽和状態におかれている自覚があるのを、隈本は知った。万事うまい具合だった。あとはもう一度別れ話をむしかえし、プレゼントを進呈することで、綺麗な結末を告げることになるだろう。

しかし、すぐにはその運びにならなかった。隈本の方の事情によってだった。店の状態に重大な手拔かりをやったのを発見した隈本は、ぎょっとしなければならなかった。手違いと手拔かりとは違う。心持が私生活の方に比重をかけすぎていたための手拔かりは彼の責任で命取りになる危険を防ぐために私事を全部放棄し、日夜をそれに注ぎこんだ。

そんなある日、隈本は三岐江の誘い出しをうけた。かの女の意気ごみにおされて、隈本は迎えに寄った車に同乗した。賭けて見る気持ちだった。車は長い夏の日なたそがれの町を通り、本郷のアパートの前に着いた。はじめて見る晴子のアパートだった。おたがいに住んでいる部屋への往来を禁じていたのだ。二階のある部屋の前で三岐江は口に指を当て、

「晴子さん、三岐江。はいってもいい？」

声とともにノックをした。ちょっと間をおいて、鍵をあける音とともに、どうぞという声が聞こえた。隈本は、三岐江の目配せをうけ、つづいて畳半畳の土間

へ足を踏み入れた。

「あら、ご一緒？」

「そうよ。お邪魔するわ。」

隈本が答える前に、三岐江は靴を脱いだ。六畳のありふれた部屋の天井で、今つけたばかりの電灯の笠がゆれている。その光をうけて棒立ちになっているのは、派手な模様のパンツと胸をひらいたアロハの男と、スリッパ一枚の晴子の姿だった。うすいナイロンのスリッパの腿の奥にくろい翳が透いていた。と思う間もなく、晴子は崩れるように座った。洋服の箱とそれから出したワンピースが畳の上に投げてあった。

「おや、洋服ができたね。」

「あら、お祭りのお邪魔をしてごめんね。さ、わるいから遠慮しよう。」

隈本と同時に口をひらいて、三岐江がまだ靴を履いたままの隈本の腕をとって廊下へ出た。靴をつっかけ、ドアをひらいたままで。

「どう、わかった？いいタイミングだったな。ああうまくいくとは思わなかった。」池ノ端へ下りる人気のない切通しの途中だ。隈本が黙っていると、

「これでお別れ確定的ね。どこかへ連れてって。」

腕をぎゅっとしめつけた。

「わかったよ、君のおせっかいな親切は。しかし、これでというのはちがう。別れ話はすんでいるのだ。君は瀬木君に妙なことをいったようだが、君には気がないよ。行ってくれ。」

ずっと組んだままにさせておいた三岐江の腕を、こっちの気持ちに通じるようにつよく振りきった。

「え？」

「札をしよう。君のいう通り、柳橋の秘伝は役に立った。オレは自信が取りもどせる。」

紙入れから抜いた幾枚かの紙幣をにぎらせると、ちょっと間をおいて、三岐江が高い笑い声をヒステリックに立てた。

「なにさ、何が秘伝さ。あんなもの。足の裏だの^{もつ}結だのって、そんなこと誰だって知ってるんだ。好村だって知ってるよ。もったいぶりなさんな。うぬぼれもいいところだ。」

「……」

隈本の頭がカッと熱くなった。が、じっとくちびるを噛んだまま、くると背

を向けた。

ひろった車のなかで隈本はとりもどしかけた自信がガラガラと崩れる音を聞いた。三岐江は咄嗟に嘘をつく才能はないし、最後の言葉には実感がこもっていた。自信とは寝床のそれだけではなく、事業にからみあっている。三岐江は好村とも関係があったのだ。いろいろと分かって来たが、そんなことはなんにもならない。

アパートにもどってドアをあけると電話のベルが鳴っていた。ためらいながら受話器をとりあげた隈本は、思いがけぬ声を聞いた。

「モシモシ、あたくし千代野。随分お忙しいのね。これで今日五回目よ。やっと、つかまえた。ハイ、今日京都から帰って来ましたの。ええ、三月ほど。立つ日にもおかけしたのよ。おきんちゃん、おきん姐さんからのお言伝。お店においででなかったの、家政婦さんに番号メモしてもらったのだけれど。」

隈本は、アッと思い出した。江ノ島の夜だ。酔っている声だった。千代野は踊りの師匠で、横山町仲間の娘のおさらいの会で知ったのだが、——おきんからの言伝とは。おきんとは、柳橋の大姐さんで、例の「秘伝」の教授者だ。

「モシモシ、——聞いていらっしゃる？おきん姐さんね、隈本さんにどうしても逢えってすすめるの。用事？羞ずかしいわ、電話でなんて。これから、お目にかかれる？」

それ以上は聞かなくとも分かる。おきんが推薦したというなら、——それならば、「秘伝」は嘘ではない。不意に、失いかけていた自信が、嵐のようによみがえった、人生すべてに。

「ありがとう。すぐ、出る。」

胸がふくらんで来た。

(いまい たつお)

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成22年4月～平成22年9月) 総務担当

運営委員会

3月30日(火)

9名出席

平成22年4月例会4月13日(火) 10時～11時40分 17名出席

議題1 会誌100号について — 記念100号の準備状況について報告があった。会誌とは別に『相模国準四国八十八ヶ所』のガイドブック的な普及版も発行することが紹介された。市の公益事業助成金との関係で今回の発行は4月30日となることが報告された。

議題2 平成22年度活動計画案について — 案が紹介され皆からの提案を要望された。

議題3 その他 — 入退会(入会1名、退会2名)の報告、会誌のバックナンバーの購入希望募集案内、レディオ湘南の生涯学習大学放送講座にて岸田劉生についての講義の依頼があったことが報告された。

お話 — 『林達夫邸を訪ねて』 講師岡田会員

3月26日、会員6名が鵠沼桜が岡の林達夫邸を訪問。写真(スライド)を用いて、邸内の家具調度品、細部の工夫等建築家の目を通した解説が加えられ興味深く聞いた。内容については会誌本文を参照願います。

運営委員会

4月27日(火)

9名出席

第24回総会・5月例会 5月11日(火) 10時～11時5分 21名出席

総会 — 中島会員の司会により内藤会長、竹村鵠沼市民センター長の挨拶の後、配付議案書の審議を行なった。平成21年度事業報告、収支決算報告、今年度の事業計画および予算案の提案がされ、全会一致で承認された。渡部瞭副会長が閉会の挨拶を行ない終了した。

引続き5月例会を行なった。

5月例会

議題1 会誌100号について — 100号として全員の協力で調査しまとめた『相模国準四国八十八ヶ所』の特集であり、138頁中91頁がカラー印刷の記念号となった。併せて昭和51年7月発行の第一号の復

刻版も配布された。当時が偲ばれます。

議題2 6月の史跡巡りについて — 6月15日『遊行寺から鎌倉道を歩く』予定が案内された

議題3 その他 — 新会員3名の紹介ならびに挨拶を受けた。

運営委員会

5月25日（火）

11名出席

平成22年6月例会 6月8日（火）10時～11時20分 20名出席

議題1 史跡巡りの事前説明 — 6月15日に予定の史跡巡りのコース案内ならびにOHPにて各ポイントの説明がされた。

議題2 その他 — 会員動向（入会1名、退会2名）、運営委員の新メンバーおよび分担変更、6月4日の六会中学での櫓の木植樹（苗木は鈴木会員提供）の状況をOHPで説明、当会から総合図書館に寄贈した内藤千代子関係の資料が図書館のホームページで検索できるようになったことが報告された。

平成22年6月史跡巡り 6月15日（火）10時～12時30分 17名参加
遊行寺境内から鎌倉道を市役所まで藤沢市文化財保護委員でもある小林会員の説明を聞きながら散策した。詳しくは今号の本文を参照願います。

運営委員会

6月29日（火）

12名出席

平成22年7月例会 7月13日（火）10時～11時40分 19名出席

議題1 今後の例会のお話および公民館まつりのテーマについて — 案の提示ならびにテーマの募集案内があった。

議題2 『相模国準四国八十八ヶ所』のガイドブックについて — 印刷部数および配布箇所案、頒布価格、等について報告された。

議題3 史跡巡りの報告 — 先月行なわれた史跡巡りについての結果報告がされた。

議題4 その他 — 会員動向（入会2名）の報告があった。

お話 — 郷土資料展示室で開催中の『鵠沼の農業、漁業、工業の移り変わり』の展示を見ながら、担当者から説明していただいた。

運営委員会

7月27日(火)

10名出席

平成22年8月例会

8月10日(火) 10時～12時

22名出席

議題1 鶴沼橋の旧後藤医院の建物について — 当会が先鞭をつけた旧後藤医院の建物保存について、国の登録有形文化財として登録されることになった。鶴沼の緑と景観を守る会に協賛のかたちで10月15日から1月15日郷土資料展示室にて資料展示されることになった。

議題2 その他 — 会誌101号の編集状況報告、今年の公民館まつり(11月6日、7日)の当会の展示計画内容案の紹介、『相模国準四国八十八ヶ所』のガイドブックの反響が報告された。新たに入会された会員の紹介ならびに、挨拶があった。

お話 — 「藤沢の歴史」について — 講師は創業200年本鶴沼の林石材店の代表林一郎氏。村岡城主村岡五郎平良文公(桓武天皇の五代目の子孫)が村岡近辺に住みつきたいきさつから始まって、鎌倉時代の様子、江戸時代の藤沢宿周辺の歴史を多岐にわたりお話していただいた。

運営委員会

8月31日(火)

10名出席

平成22年9月例会

9月14日(火) 10時～12時

23名出席

議題1 会誌101号について — 編集内容が報告された。

議題2 今井達夫遺稿の有効活用について — 当会が所有している遺稿を有効に活用するため、県立近代文学館に寄贈することが報告された。

議題3 その他 — 新たに入会された会員の紹介があった。藤沢市総合図書館に寄贈した内藤千代子の著作本および当会についての記事が神奈川新聞(9月14日付)に掲載されたことが報告された。

お話 — 『すわん會 こぼればなし』河井郁子さん — 割烹「運河」の元女将の河井郁さんと有田副会長の対談形式でお話を進めた。會は昭和29年今井達夫の提案で、藤沢近辺の文化人が集う親睦会的な場として誕生。第二の東屋と言われる人もいるくらいであり、そこに集まった著名な方々のひとなりやエピソードをお話していただいた。持参された多くの貴重な色紙も拝見することができた。

(文責 佐藤 弘)

編集後記

*今号は岡田編集長が「藤沢市生涯学習大学かわせみ学園」の放送通信学科講師として、「岸田劉生と鶴沼」を講義する準備で多忙のため、渡部が代役を引き受けることになりました。

(11月23日(祝)～12月28日(火)全6回。レディオ湘南83.1MHzで毎週火曜日10:30～11:00、再放送は毎週木曜日20:30～21:00。FM放送での本放送終了後、インターネットで約半年間聞ける。テキストは学習文化センターで入手可)

*最初に、6月15日(火)小林政夫氏指導で開催された見学会「鎌倉道を歩く」遊行寺～若尾山コースの報告と感想を、入会間もない西野賢二氏にお願いしました。

*山上英男氏のエッセー「くげぬま断章」も3回目を迎え、ますます筆が冴えています。次号にも続きます。お楽しみに。

*続いて、植松民也氏がご自宅のある川崎市多摩区と別宅のある鶴沼海岸を比較した「多摩と湘南 ―私の二都物語―」を寄せられました。これも次号に続きます。

*鈴木三男吉氏のご努力による楷ノ木の植樹も市内各中学校をはじめ、昨秋には公民館の裏庭で行われました。一連の植樹の模様を、竹内広弥氏にレポートしていただきました。

*今年は国連の定めた「国際生物多様性年」です。そこで、鶴沼に見られる生物相を様々な観点から眺めてみました。

*3月26日(金)、念願の林 達夫氏邸を有志で見学することができました。その報告と、雑誌「スタイル」昭和14年8月号に館 真氏が掲載された「林達夫のお住い拝見」を転載しました。

*故今井達夫氏の遺稿集も、今号の「花卉の虚」で6回目です。遺稿のデジタル化も終了しましたので、生原稿は神奈川県立近代文学館に寄贈し、多くの研究者のご利用に役立てることにしました。また、今井氏の主宰された「すわん會」の話題を中心に、「運河」の元女将河井郁子さんのお話を9月例会で伺いました。その模様は次号に掲載できると思います。

(渡部)

『鵜沼』 第101号
平成22年 9 月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸2-10-3
鵜沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>